

2023年3月1日

みずほディーラーズアイ (2023年3月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 132.00 ~ 142.00

市場営業部 為替営業第一チーム 西 拓也

■ 先月の為替相場

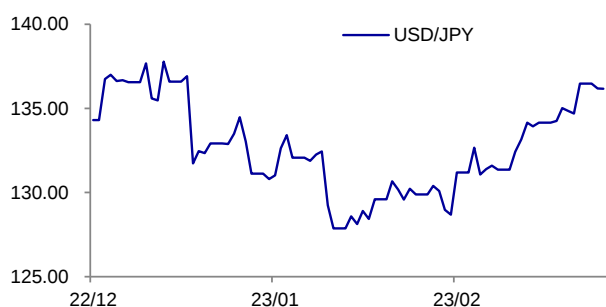
2月のドル/円相場は、130円台前半でオープン。月初、パウエルFRB議長のハト派発言を受け128円台前半まで下落するも、その後は堅調な米経済指標や日銀総裁の後任人事案提出を経て、ドル/円は136円前半まで上昇した。月初ドル/円は130.12円でオープン。1日、FOMCは+25bp利上げとなったが、パウエル議長による「ディズインフレのプロセスが始まった」との発言で米金利低下と共に128円台へ下落。2日、128円台前半まで続落。3日、米1月雇用統計、米1月ISM非製造業景気指数の良好な結果を受け131円台まで上昇。第2週。6日、「政府が日銀次期総裁に雨宮氏に打診する案を調整」との報道を受け円売りでスタート、海外時間には132円台後半まで上昇。7日、パウエル議長発言が警戒されていたほどタカ派ではなかったことから、米金利低下と共に130円台半ばまで一時急落。9日、日銀総裁に関する報道で上下も、軟調な米国債入札を受けた米金利上昇を背景に131円台半ばに値を戻した。10日、「日銀新総裁、植田和男氏を起用へ」との報道に、雨宮氏が予想されていた中円買いで反応し129.80円まで急落も、植田氏が「現状では金融緩和の継続が必要だ」と述べたことでドル/円は131円台半ばまで反発。第3週。13日、日銀新体制での早期の金融緩和修正期待が後退し、132円台後半まで上昇。14日、米1月消費者物価指数(CPI)が市場予想を上回る結果にFRBによる利上げ長期化が意識され、米金利上昇につれ133円台前半に上昇。15日、米1月小売売上高や2月NY連銀製造業景気指数が予想比上振れたことを背景に、134円台前半まで上昇。16日、米1月生産者物価指数(PPI)が予想を上回り、FRB高官がタカ派発言を行うと134円台半ばまで上昇。17日、前日の流れを受け、135.12円まで上昇も、その後は伸び悩んだ。第4週。20日、米国休日の中134円台前半で推移。21日、米1月製造業/サービス業PMI(速報値)が市場予想を上回ると135円台前半へ上昇。22日にかけて米金利低下と共にドル/円も135円を割り込むも、FOMC議事要旨(2月会合分)で引き続きFRBのタカ派姿勢が意識され反発。23日、米新規失業保険申請件数でタイトな雇用市場が意識されると135円台を付ける場面もあった。24日、植田日銀新総裁候補が所信聴取にて現在の金融緩和を支持、その後、米1月個人消費支出(PCE)デフレーターが予想比上振れるとドル買いの流れが強まり、136円台半ばまで上昇。第5週。27日、136円台前半で揉み合う展開。28日、クロス円上昇に連れ高となり136.92円まで高値更新するも、米2月コンファレンスボード消費者信頼感指数が予想比悪化したことで136円近辺まで下落し、136.23円でクローズした。

■ 今月の見通し

3月のドル/円相場は、引き続きドル高・円安トレンドの継続を予想する。足許のドル/円は、1月16日の127.22円をボトムに上昇に転じ、2か月ぶりの水準まで上昇してきた。先月は米景気指標・インフレ指標が軒並み市場予想を上回ったことで、市場ではFRBによる金融引き締め再加速の思惑から、今月のFOMC以降、3会合連続、計+75bpの利上げ織り込みが進んだ。また、市場が織り込む米政策金利のターミナルレートが一段と上昇しているだけでなく、既に織り込まれていた23年中の利下げ期待までも剥落してきた。加えて、本邦サイドにおいても日銀正副総裁候補の所信聴取を経て、早期の政策転換期待が後退している。現体制最後となる3月の金融政策決定会合(3月9日～10日)でも、先日の雨宮副総裁による国会答弁を踏まえれば現状維持を決定する見込みであり、昨年来のように日米金融政策の違いが意識されやすく、円売り・ドル買いが優勢となるだろう。また、FRB高官発言や米経済指標にも注目が集まる。足許の米経済指標の堅調さを踏まえるとFRBのタカ派化は必然と思われるが、その中でも今後の利上げペースやターミナルレートについての発言に注目したい。3月会合では+25bpの利上げ幅が優勢であるものの、+50bp利上げを期待する向きも台頭している。ターミナルレートについては、12月FOMCで示されたドットチャートから上方修正される可能性もあるため、当局者の発言によってはドル買いムードに弾みがつくだろう。また、2月分の米経済指標も力強さを維持する公算が大きく、ドル/円上昇の流れに拍車がかかりやすい。しかしながら、本邦貿易収支が改善傾向にあることや投機筋の円売りポジションが縮小していることも考慮すれば、昨年ほどの急速なドル/円相場上昇は考えづらいため、緩やかな上昇を基本線と考えている。一方、予想外に強い結果となった米1月雇用統計・小売売上高について、季節要因ではないかとの指摘もFRB高官から出ていることから、2月分の米経済指標が冴えない結果となる場合には、ここ最近の強い指標が単なる季節要因の一時的なブレであるとの見方からドル売りが急速に進むリスクもあるため、ダウンサイドリスクにも注意する必要があるだろう。

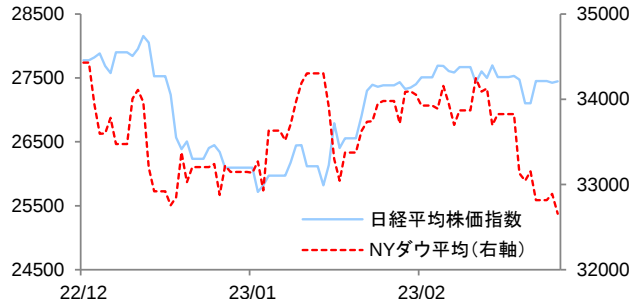
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	米ISM製造業景気指数	1月	48.0	47.4	48.4
2/1	FOMC政策金利(上限)	-	4.75%	4.75%	4.50%
2/3	米非農業部門雇用者数変化	1月	189K	517K	223K
2/3	米失業率	1月	3.6%	3.4%	3.5%
2/3	米ISM非製造業景気指数	1月	50.5	55.2	49.6
2/14	米消費者物価指数	1月	6.2%	6.4%	6.5%
2/15	米小売売上高	1月	2.0%	3.0%	-1.1%
2/15	米NY連銀製造業景気指数	2月	-18.0	-5.8%	-32.9%
2/16	米生産者物価指数	1月	5.4%	6.0%	6.2%
2/24	米個人消費支出デフレーター	1月	5.0%	5.4%	5.0%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	11名	140.50 ～ 133.00	ベア	8名	138.50 ～ 130.00	※ レンジは中心値
河合	ブル	141.50 ～ 132.00	日銀次期総裁の所信表明を受け、日銀による早期の政策修正期待が後退する一方、FRBによる利上げ長期化が意識された日米の金融政策スタンスの違いから、短期的にはドル堅調な展開を予想。			
宮地	ブル	141.00 ～ 133.50	足元は米国のインフレ継続に焦点が当たり、ドルの巻き戻しが顕著。一方、本邦サイドでは日銀次期総裁に係る材料も消化しており、短期的にドル/円相場ではドルが選考されやすい地合を予想。			
筒井	ベア	139.00 ～ 130.00	利上げペースは一旦5%台半ばでほぼ織り込む。インフレ指標が方向性を定めるが、横ばい或いはやや強含む程度では金利市場の反応は限定的で、為替はドル安に反応しやすい。帰属家賃は下落傾向にあることは留意。			
加藤	ベア	139.00 ～ 133.00	次期日銀総裁候補の植田氏は所信聴取において世耕参院幹事長に大規模緩和は副作用よりメリットが大きいと答えているがそれはリフレ派への配慮。実際には効果と副作用を検証し、どこかで舵を切らなければならないことはわかっているはず。			
山崎	ブル	139.50 ～ 133.00	3月の日銀会合は無難に通過するものとみられ、日金融政策は目先は現状維持で推移するものと予想。米国経済は堅調に推移していることから引き続きドル堅調地合が続くものと予想する。米経済指標と、日銀関連のヘッドラインには注意。			
伊藤	ブル	141.00 ～ 131.00	直近の強い米経済指標を受けて景気抑制的な政策の長期化が織り込まれた。今後の指標次第では更なる金利上昇余地あり、ドルの強さが継続する可能性。本邦サイドは政策修正観測の後退、貿易赤字を鑑みれば円を積極的に買う材料はない。			
山岸	ブル	139.00 ～ 133.00	堅調な内容の米経済指標が相次ぎ、好調な景気とタイトな雇用でFRBのインフレ警戒感強い。あと3回メインも上振れ余地あり、「より高く・長く」続く利上げがドル買い材料。過去最大規模の本邦貿易赤字で需給面からも円が売られやすい。			
尾身	ブル	138.00 ～ 133.00	米国の利上げ長期化を織り込んだドル買いと日銀の緩和姿勢維持を背景にドル/円は底堅い推移が継続すると予想。但し、足元、米経済指標の結果は好調となっているが、指標結果が悪くなってくるとドル買いはやや弱まってくるか。			
上野	ベア	138.00 ～ 130.00	消費者物価指数など低下基調にあった米インフレ系指標が市場予想比上振れたこと等でドル買いが強まっている認識だが、今月の結果をもってFRBが金融政策の方針転換を決定する蓋然性は小さいと考える。2月上昇の揺り戻しを想定。			
甲斐	ベア	137.50 ～ 134.50	月初は堅調な米指標を背景にドル買い継続予想。しかし、年内利下げ織込みが剥落した中で、更なる利上げ期待の織込みには時間とデータが必要か。黒田総裁の最後のBOJサプライズ警戒や3月ドットチャートでのタカ派化期待剥落には留意。			
松永	ベア	138.50 ～ 132.50	強い米経済指標を受け、市場は5%半ばまでの利上げを織り込み済み。足許でリスク資産からの資金流出がみられる中、FRBのタカ派なコミュニケーションが継続するとは想定しづらい。FOMC後は、調整からドル売りに押されそう。			
小野崎	ベア	138.00 ～ 130.00	2月に公表された米経済指標の強い結果にFRBの利上げ継続期待が高まりドル買い地合いとなった。ほんの数ヶ月で利上げ継続を期待する動きとなったがFRBの政策変更の蓋然性は慎重に見極める必要があると考える。			
原田	ベア	140.00 ～ 129.00	2月は米利上げの折り込みや、予想以上の米雇用の強さなどから反発。一方で、雇用以外の経済指標は引き続き弱含みが続いており、Fedの利上げも今後は慎重にならざるを得ない。ドル/円の上値は徐々に重くなると予想する。			
上遠野	ベア	138.50 ～ 129.00	米国インフレ高止まり感を背景にターミナルレートの上方修正を余儀なくされているものの、年内利上げ停止観測が主流である限りドル買いは限定的か。債務上限問題や格差問題等複数抱える課題の行方を眺めながら冷静な相場展開を想定。			
小林	ブル	140.50 ～ 131.00	堅調な米経済指標の結果を受けて、米利上げの長期化観測を背景に、ドル買いトレンドが再燃。一方で、日銀による急激な政策変更懸念がほぼ払拭されており、改めて日米金融政策の方向性の違いを背景に堅調推移を予想する。			
逸見	ブル	141.00 ～ 132.00	日銀の緩和策縮小に期待した円買いが一巡した一方で、米国の早期利下げ観測は後退。経済指標次第で米金利にはまだ上昇余地があることやFRBのタカ派転換の思惑も相俟ってドルは底堅い推移を予想。			
鈴木	ブル	140.50 ～ 133.50	インフレ進行は根強い上、雇用状況も良好であり、ドル高地合いが継続。日銀の後任人事や今後の政策修正に対する期待も一服した感があり、ドル/円のサポート材料となりそう。			
木村	ブル	140.00 ～ 134.00	植田日銀新総裁候補は金融緩和の出口戦略を検討している様子であるが、長く続けてきた異次元緩和を狩猟するには時間を要するため3月のBOJは慎重に動くと思料。ドル買い基調の強まりからドル/円は底堅い相場継続を予想。			
大熊	ブル	140.00 ～ 133.00	足元の堅調な米経済指標を受けた利上げ長期化観測の高まりから、ターミナルレートの引き上げが有力視されている。一方、日銀の金融引き締めは緩やかなペースになると見られることから、堅調地合いが続くと予想。			

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0300 ~ 1.0900
EUR/JPY 138.00 ~ 147.00

市場営業部 為替営業第二チーム 伊藤 拓義

■ 先月の為替相場

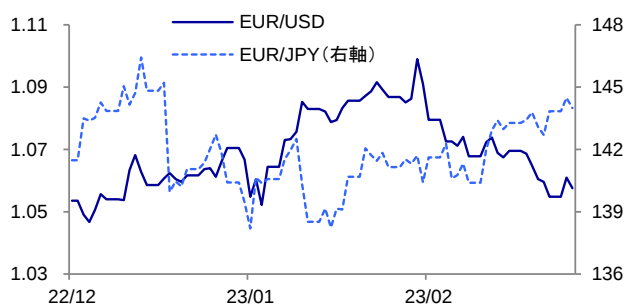
先月のユーロ相場はドル買戻しの地合いに軟調推移となった。
月初、米FOMC後のパウエルFRB議長会見を受けた米金利低下を背景に、ユーロ/ドルは昨年4月以来となる1.10台に急伸。続くECB政策理事会では+50bpの利上げを決定するも、ラガルドECB総裁による足許のインフレ鈍化への言及が材料視され、独金利が低下すると一時1.09を割り込んだ。さらに週末に発表された米1月雇用統計、米1月ISM非製造業指数が予想を上回る結果となるとドル買いが強まり、ユーロ/ドルは1.08を割り込む流れとなった。その後も好調な米指標を背景としたドル買い戻しの流れが継続する中で、ユーロ/ドルはじわじわと上値を切り下げていく展開となった。ただ、14日に発表される米1月CPI待ちの様相が強まると、下値では底堅く推移する場面も垣間見られた。米金利の動きに連動する相場が続く中、米1月CPI発表後には一時週高値となる1.0805までの上昇もみられたが、FRBの利上げ長期化が意識され米金利が上昇するとすぐに失速。ユーロ/ドルは米金利が低下する場面では底固さを保つものの、全体的に良好な米経済指標やFRB高官のタカ派な発言を受け米金利が上昇すると、ドル買いのあおりを受けやすく1.06台へ下落した。2月FOMCはパウエル議長が会見でディスインフレに言及したことからハト会合との反応であったが、公表された2月FOMC議事要旨では、50bp利上げを複数のメンバーが支持していたことが明らかになった。ややタカサブリイズな内容で、引き続きFEDのタカ派スタンスを確認する結果となると、ドル買いが進みユーロ/ドルは1月6日以来の1.05台まで下落した。欧州のCPIも高止まり、ECBは利上げ継続路線を進んでいるが、米金融政策パスを市場は重要視。24日には米1月個人消費支出(PCE)デフレーターが予想を大幅に上回る結果となったことで更にドル買いが優勢となり、ユーロ/ドルは一時週安値の1.0536まで下落した。27日は米金利がやや下落する中で、独金利の上昇が進みユーロ/ドルは1.06台を回復。長年の懸案事項だった英国とEUがBrexitに係るアイルランド問題で合意とのヘッドラインも欧州通貨の買戻しを誘った。

■ 今月の見通し

今月のユーロ/ドルは上値の重い推移を予想。
ハトFEDvsタカECBの構図がユーロ/ドルを支えてきたものの、先月は好調な米指標にドル買戻しの動きが活発化。引き続きユーロ/ドルはドルの強弱に依存した動きとなりそう。米経済の堅調さが景気抑制的な政策の長期化を連想させることから米金利に上昇圧力がかりやすく、基本的にユーロ/ドルの上値は重い。2月のFOMCでは+25bpと利上げ幅を縮小させたものの、強い経済状況を背景に次回FOMCでの+50bp利上げ織り込みも進んでおり、今後も良好な米経済指標が続けばドルの買戻しが継続する可能性が高い。
一方でECBは2 会合連続で+50bpの利上げに踏み切り、預金ファシリティ金利を2.00%から2.50%に引き上げた。引き続きユーロ圏消費者物価指数(HICP)は総合ベースこそ失速しているもののコアベースは高止まりしているため、今月の会合での50bpの利上げに波乱はないだろう。3.50%がターミナルレートになるとの見方が多い中、その次の5月会合でのターミナル到達を織り込む動きが進んでいる。ただ、市場はすでにその後の会合での利上げを織り込んでいる(3.75%)ため、ユーロ/ドルがさらに上昇する可能性は低そう。ただ、経済活動の見通し改善や労働市場の底堅さからECB高官からはタカ派発言が続いており、より高いターミナルレートの可能性やターミナルレートを据え置く時間が長期化する可能性は依然として高い。今後、エネルギー価格の下落がインフレ鈍化に寄与する時期が到来すると考えられるが、根強いインフレ圧力にECBのスタンスがタカ膠着するリスクはあるのではない。FEDの金融政策もタカ化する可能性が高まる中で、突如として引締めによる成長減速にトピックが移る可能性も。引締めによる株安がクロス円に波及し、上値を押さえられることも考えられるか。
今月は昨年12月の会合で決定された量的引き締め(QT)が実施される。毎月150億ユーロずつ資産を圧縮していくが、市場に与える影響は限定的か。月初の経済指標では2日(木)発表のユーロ圏2月HICP(速報)の結果に注目したい。

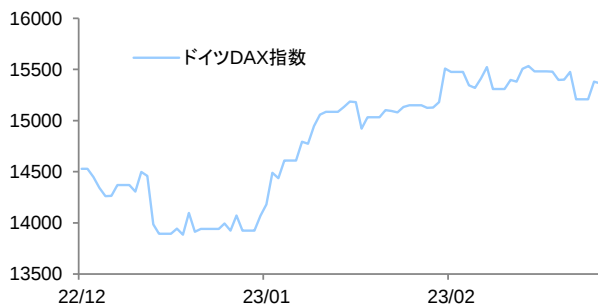
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	EU圏 CPI速報	1月	8.90%	8.50%	9.20%
2/1	EU圏 CPI(コア)速報	1月	5.10%	5.20%	5.20%
2/1	FOMC政策金利(上限)	2月	4.75%	4.75%	4.50%
2/2	ECB預金ファシリティ金利	2月	2.50%	2.50%	2.00%
2/3	米非農業部門雇用者数	1月	189K	517K	223K
2/3	米 平均時給(前年比)	1月	4.3%	4.4%	4.6%
2/14	米CPI(前年比)	1月	6.2%	6.4%	6.5%
2/14	米CPIコア(前年比)	1月	5.5%	5.6%	5.7%
2/23	EU圏 CPI確報	1月	8.60%	8.60%	8.50%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	15名	1.0900 ～ 1.0450	ベア	4名	1.0825 ～ 1.0300	※ レンジは中心値
河合	ブル	1.1000 ～ 1.0400	足元強い米経済指標を受けユーロ、ドルは調整局面にあるが、コアベースで過去最高を記録しているユーロ圏消費者物価指数を背景に、ECBのインフレ長期化に対する懸念は強く、タカ派姿勢継続から、ユーロ堅調な展開を予想。			
宮地	ブル	1.1100 ～ 1.0450	米国の粘り強いインフレにドルが買い戻される局面もあるものの、ECBのタカ派スタンスは不変であり、ユーロの下値は限られよう。			
筒井	ベア	1.0750 ～ 1.0250	ユーロ圏経済の回復傾向は、天候要因とみるべき。需要の先食いにあると見え、個人消費中心に経済指標を注意深く精査する必要がある。ECB高官のタカ派発言に金利市場の反応も限定的であり、米ドル以上にEUR為替は下落を加速。			
加藤	ブル	1.0900 ～ 1.0500	2月は調整色が強かったが基本的にECBがインフレを注視しているスタンスに変化はない。指標が落ち着きを示してこない以上結局ユーロは堅調基調に戻ると思う。			
山崎	ブル	1.0900 ～ 1.0400	ユーロ圏は引き続き消費者物価指数Iが上昇しており、引き続きユーロ堅調推移が想定される。ただし、米国も経済が堅調でありドルも相応に強いことから、上値は限定的か。ウクライナ問題には注意が必要か。			
伊藤	ベア	1.0900 ～ 1.0300	ECB利上げパスは織り込み済み。寧ろ2月FOMCで利上げ速度を落としたFRBの利上げ再加速に警戒。今月も米指標が良好ならば更にドル高が進む可能性。引締めによる株安がクロス円に波及し、上値を押さえられることも考えられるか。			
山岸	ブル	1.0900 ～ 1.0300	ECBの利上げ継続観測で底堅い展開を予想。ユーロ圏失業率は最低水準、またコアインフレ率は上昇が加速。ECBは雇用情勢が賃金・物価に波及するインフレスパイラルに警戒感を示し、賃金インフレが落ち着くまでタカ派スタンス継続か。			
尾身	ブル	1.0800 ～ 1.0300	ECBの利上げ継続により底堅い推移が継続すると考えている。但し、米国も利上げの長期化が織り込まれて来っておりUSDも堅調なため、ユーロ/ドルの水準は硬直しそう。			
上野	ブル	1.1000 ～ 1.0500	ドル高の流れを受けて軟調な推移となっているユーロだが、相応の金利水準となる中でドル買いのきっかけとなった消費者物価指数や雇用統計等が継続して良好な結果となる蓋然性は小さいと考える。基本的には下落局面からの展開を想定。			
甲斐	ブル	1.0800 ～ 1.0450	月初は堅調な米指標を背景にドル買い継続予想。しかし、年内利下げ織込みが剥落した中で、更なる利上げ期待の織込みには時間とデータが必要か。3月ECBでの欧米金利差縮小、3月ドットチャートでのタカ派化期待剥落には留意。			
松永	ブル	1.1000 ～ 1.0450	FRBの利上げ長期化への思惑とリスクセンチメントの悪化から、足許でユーロは弱含むも、欧州経済が持ち直す中、インフレ高止まりを背景としたECBの利上げ長期化観測が中長期的にはユーロをサポートしそう。			
小野崎	ブル	1.1100 ～ 1.0500	欧州圏のインフレ警戒感は引き続き強くECBの利上げ姿勢も継続されるだろう。FRBの利上げ継続期待も高まっているものの、ECBの利上げ姿勢の方が高くユーロ買い優勢の展開か。			
原田	ブル	1.0900 ～ 1.0450	ユーロ圏の景気減速懸念は継続しているものの、インフレ警戒感には依然強く、ECBのスタンスに変更はないことからユーロは底堅い動きを予想する。ただし、ユーロ圏内のインフレのピークは過ぎた可能性もあり、上値は限られるだろう。			
上遠野	ブル	1.0900 ～ 1.0450	インフレ高止まりを背景としたECBの大幅利上げ観測が根強く短期的にユーロ強含みの展開か。春先にかけてウクライナ情勢の変化には注視しつつも、2月軟調推移からの反転上昇を基本シナリオとしておきたい。			
小林	ベア	1.0850 ～ 1.0300	欧州圏では景気低迷が継続している一方、堅調な経済指標を背景に、FRBによる利上げの長期化が見込まれており、ユーロ/ドルは軟調推移を予想。欧州圏の歴史的な高インフレを背景に引き締め継続が見込まれており、下値も限定的となろう。			
逸見	ベア	1.0800 ～ 1.0300	ECBはタカ派スタンスを継続も、米インフレ懸念の再燃によってFRBのタカ派化への思惑が根強く、ユーロは対ドルでジリ安の展開を予想。			
鈴木	ブル	1.0900 ～ 1.0400	景気減速懸念は依然として強いものの、インフレ抑制に軸を置いたECBのタカ派スタンスは不変。対ドルでも引き続き底堅い推移となることを予想する。			
木村	ブル	1.0650 ～ 1.0500	コモディティやウクライナの地政学リスクは拭えないが、欧州金利はインフレに追隨して上昇しており、ユーロ/ドルは1.05台では押し目買いがしやすいものと思われ、年度末のドル買いニーズとの綱引きで値幅はでにくい相場を予想する。			
大熊	ブル	1.1000 ～ 1.0450	ラガルドECB総裁は利上げ継続の方向性を改めて強調しており、金利先高観がユーロをサポートしている。ECBの利上げ幅がFRBを上回る可能性は未だ高いこともあり、底堅い推移を予想。			

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.1750 ~ 1.2350
GBP/JPY 158.00 ~ 166.00

欧州資金部 神田史彦

■ 先月の為替相場

先月のポンドはドル買いに押され下落。月初1日は対ドルで1.23レベルで始まり、米FOMC待ちで慎重なスタートとなった。NY時間にFOMC結果がややハト派的と捉えられドル売り圧力にポンドは上昇。2日には月中高値となる1.2401をつけるも、英中銀が予想通り0.50%利上げし政策金利を4.00%とすると、英金利が下落に転ずる。声明文やペイリー英中銀総裁の記者会見がハト派的と解釈される中でポンドは結局1.22台前半まで下落。週末3日は堅調な米1月雇用統計や米1月ISM非製造業指数が予想を大きく上回ると、さらなるドル買いに1.20台へ下落した。週明け7日には日中1.20台を割り込むがNY時間にパウエルFRB議長がディスインフレのプロセス開始について発言したことでドル売りとなり1.20台半ばを回復。9日は再びドル売りとなり1.21台後半へ。週末10日は朝方、注目の英第四四半期GDPが発表となり、結果は前期比ゼロ成長となった。これにより(テクニカルに)英経済は不況を当面回避した。ただ英ポンドの反応は薄く、若干買われるにとどまる。日銀人事報道にドル/円が振られ、1.21を挟んでもみ合いに。14日は朝方の堅調な英1月雇用統計を受けて1.22台へ。米1月消費者物価指数が予想以上の減速となったことで1.21を割り込む。午後に米1月小売売上が予想を上回った伸びとなりドル買いが加速し一時1.19台まで下落した。16日は1.20台半ばで始まるが、米1月生産者物価指数が予想比上振れたことでドル買い。再び1.19台に下落しそこまでの月中安値1.1915をつけた。週末17日もその流れは続き、予想を上回る英1月小売売上が出たものの、1.19台前半へ値を下げた。21日には英2月総合PMIが予想に反して好悪の基準50を上回ったことでポンドは一気に1.21台を回復。しかしじりじりと売りに押される中、週末24日には米14月の個人消費指標が予想を上回るとドル買いに押され再び1.19台前半へ下落。週明け27日には、スナク英首相がフォンデルライエン欧州委員長がブレクジット後も決着がついていなかった北アイルランドの取り扱いについて合意に達したとの報道でポンドは1.20台まで買い戻された。

■ 今月の見通し

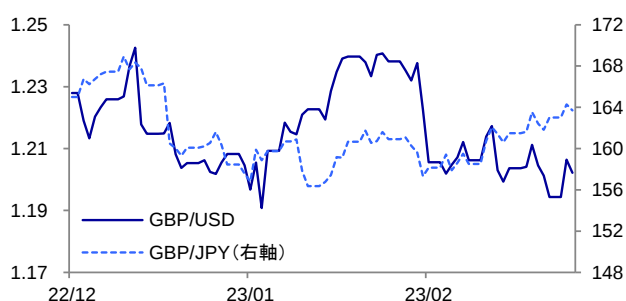
今月のポンドは上値重い推移を予想。英中銀は23日の金融政策委員会を開く。弊行シニアエコノミストのアッシャーによると0.25%の利上げを予想すること。前回2月の会合後の会見では、記者から「インフレ率の減速を予想しながらもなぜ利上げを継続するのか」との質問について、ペイリー英中銀総裁は明確な回答をしなかった。インフレ率がターゲットを下回ったとの確証がまだ得られておらず、インフレリスクが制御できたことについてより確証を得る必要がある、との説明だった。ブロードベント英中銀副総裁が「見通しの平均と実測値にはたいい大きな差が出るもの」と述べたことも中銀予測の中央値からの上方リスクを見る中銀姿勢を著しており、利上げを見込む理由とのこと。なお金利先物市場では、先月の英2月PMIの上振れで0.25%利上げはほぼ織り込まれた模様だ。金融市場ではインフレのピークアウトが見込まれだしてはいるものの、引き続き英国内では「Cost of living」高騰についてのヘッドラインが目立つ。一部調査ではパスタの小売り価格が2年前に比べ2倍になったとのこと。確かにヘッドラインでは英CPIは10月の11.1%をピークに減速しているが、食品に関しては引き続き上昇トレンドで1月には前年比16.8%だった。各セクターでのストライキも頻発しており賃金起因のインフレ圧力も引き続き強そう。経済対策重視のトラス前政権下の英国債暴落は記憶に新しく、現政権はプライマリーバランスの改善を重視している。某調査会社の世論調査では、同政権の退陣間際の不支持率が73%だったのに対し、2月末時点で現スナク政権の不支持率も70%弱と高い。4月には現行の光熱費補助金がカットされ家計の負担が大きく増える(月々の光熱費の請求書には補助金適用前の金額も載っており、筆者の電気代の場合は1年前の3倍以上の金額が見えており大変憂鬱である)。4月以降の英経済については個人的にはさらなる停滞を予想しており、いまいちピリッとしないう英中銀の政策金利も相まって、上値重いポンドの動きを予想する理由だ。なおテクニカル面では1.19台前半にある200日線が今年に入ってよくサポートとして働いており同水準での攻防も注目される。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で有名なインフルエンサー』
ブラウン管の向こうに、手慣れた様子で手元のメモを読み上げ、マイクを片手に裕次郎の曲を甲高い声で紹介する司会者の姿を目にしながら、僕は家族との夕ご飯を終え食卓を後にする。膨れた腹を抱えソファに座ると、プロ野球ニュースへとテレビのチャンネルを切り替えた。衝動を抑えながら、学校のクラスメイトとの昼間の会話を振り返る。「夜更けの街にうるむ夜霧よ、知っているのか別れのつらさ」。煌びやかな舞台照明に照らされ、恰幅の良く眉間に皺を寄せた一人の男性が、ゆっくりと歌詞を進めていく。音楽の授業となると音楽室に移動することだけが楽しみな僕にとって、合唱曲の練習も、リコーダーのテストも、苦痛の種であった。加えて、授業の開始直後にトイレに立った僕を、まるで大事な楽器を壊したかのように叱責した音楽の先生Tが、いっそう僕の音楽の授業へのやる気を削いだことは言うまでもない。それでも、少し前の授業で聴かされたアルビノーニのメロディーは、学校の帰り道や塾での授業中、不思議とふと頭の中を巡ることがある。結局、プロ野球ニュースを観ることなく布団に入った僕は、翌朝、いつものように同じクラスのYからの電話で目を覚ます。当日の時間割を、朝の電話で僕が彼に伝えることが日課になっている。いつものように学校で授業を受け、気になる女の子にちょっかいを出し、一日を終えると、友達と習い事のスイミングに向かった。子供の声で騒めく送迎のバスでは、運転手がお気に入りの曲を集めたカセットをつけ、川の流れのようにが運転席から静かに漏れ聞こえている。先日ブダペストに旅をした際、教会でのコンサートに立ち寄る機会があった。数人のバイオリニストが奏でるアルビノーニのメロディーが、ほんの束の間、意図せずあの頃の僕と再会する一助となった。

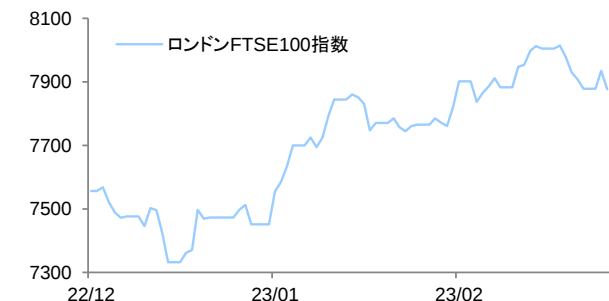
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	製造業PMI	1月	46.7	47.0	46.7
2/2	英中銀政策金利		4.00%	4.00%	3.50%
2/3	サービス業PMI	1月	48.0	48.7	48.0
2/6	建設業PMI	1月	48.5	48.4	48.8
2/10	鉱工業生産(前年比)	12月	-5.2%	-4.0%	-4.3%
2/10	GDP(前年同期比)	4Q	0.4%	0.4%	1.9%
2/14	ILO失業率	12月	3.7%	3.7%	3.7%
2/15	消費者物価指数(前年比)	1月	10.3%	10.1%	10.5%
2/17	小売売上高(含自動車/前年比)	1月	-5.4%	-5.3%	-6.5%
2/21	製造業PMI	2月	47.5	49.2	47.0

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6600 ~ 0.7000
AUD/JPY 89.00 ~ 93.40

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

2月は2日に月間高値0.7158を付けた後、月末にかけて0.66台後半まで下落した。月初FOMCは+25bp利上げを決定。パウエルFRB議長の発言がハト派的と捉えられ米債利回りは大きく低下、株高・米ドル安となり、豪ドルは0.7145まで上昇し、2日はその流れを引き継ぎ上値を6カ月ぶり高値0.7158まで更新した。その後直近の複数の大規模レイオフで米1月チャレンジャー人員削減数が102,000人越えの2020年以来の多数となったが、米新規失業保険申請件数が減少。米国労働市場の底堅さを見せた事で米ドル買いの流れとなり0.7069まで下落した。3日、米1月雇用統計が市場予想を上回り0.69台前半まで下落。7日、RBA理事会では事前予想通り政策金利を+25bp引き上げ3.35%とし、声明文では「今後数か月で更なる利上げが必要になると考えている」との文言を維持する一方、「政策の道筋は事前に決まっていな」という文言を削除した。声明文の変化がタカ派的と解釈され豪ドルは上昇。更にその後パウエル議長が「2023年はインフレが大幅に鈍化する年になる」と述べた事が材料視され0.69台後半まで上昇した。13日、中国株下落で一時0.6891まで下落し、一時0.69台後半まで戻したが、14日、米1月消費者物価指数(CPI)でインフレ圧力が確認されると、米金利上昇に伴いドル買いとなり0.6942まで下落した。15日、ロウRBA総裁が上院公聴会で利上げが予想以上の消費支出を抑制するリスクがある一方で、利上げがまだ十分でない可能性があるとの認識を示した事で0.6865まで下落。20日、中国景気回復への楽観から上海株が昨年11月以来の上昇幅を記録し豪ドルは支えられた。21日、2月RBA議事要旨では+25bpの他+50bpに利上げ幅を戻すかどうか議論されたことが判明。但し米2月PMI(速報)が堅調な結果となり、豪ドルは下値を追う展開となった。22日、豪10～12月期賃金指数が10年ぶりの高水準となったが、RBA見通しや市場予想を下回り、豪ドル売りとなった。2月FOMC議事要旨では「ほぼ全て」の当局者が+25bpへの利上げ減速に賛同したが、「数人」は+50bp利上げを支持した事が明らかとなった。更に「物価上昇率が目標の2%に向けて低下していると確信するまで制約的な金融政策が必要」との意見も出るなど、物価が高止まりすればタカ派路線に回帰する可能性を示唆した。これを受けて米株は下落し、豪ドルは一時0.6795まで下値を下げた。24日は米1月個人消費支出(PCE)デフレーターが予想を上回り、FRBへの利上げ圧力が強まったとの見方から米金利が上昇、豪ドルは0.6719まで下げ、月末にかけて一時0.67台を割った。

■ 今月の見通し

今月の豪ドルはタカ派路線に回帰する可能性の出してきたFRBと豪州の金融政策軌道調整を見ながら弱含む展開を予想する。現在市場で織り込まれている米政策金利ターミナルレートは5.4%となっており、年内に+80bp程の利上げを見込んでいる。一方、豪政策金利ターミナルレートは4.35%で年内に100bpの利上げが織り込まれている。今月は7日にRBA金融政策決定会合、22日にFOMC政策金利発表が予定されている。引き続き政策決定までに発表されるデータの一つ一つ精査していきたい。

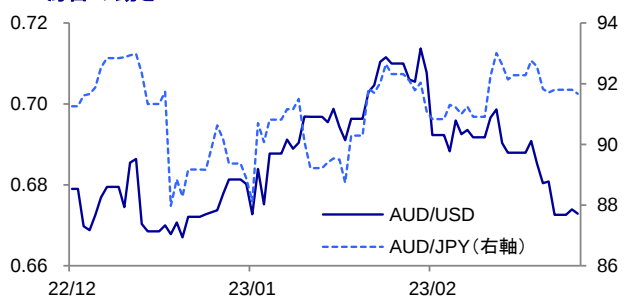
2月、米国では大規模な複数のレイオフが相次いだにも関わらず、新規失業保険申請件数や失業保険継続受給者数が減少し、米1月雇用統計も予想を上回る結果となり米国労働市場の底堅さが見られた。また、米1月CPIではインフレ圧力継続が確認され、米1月生産者物価指数も予想を上振れとなった。加えて米1月PCEデフレーターが予想を上回り、インフレ圧力が根強いことを示唆。また、2月のFOMC議事要旨では「ほぼ全て」の当局者が+25bpへの利上げ減速に賛同したものの、数人は+50bp利上げを支持しており、「物価上昇率が目標の2%に向けて低下していると確信するまで制約的な金融政策が必要」との意見が出るなど、見通しに関してタカ派に傾斜している事が窺える。

一方で豪州ではRBA議事録要旨で+25bp利上げに加え+50bpに利上げ幅を戻すかどうか議論されたことが判明し、インフレがこれまでの想定よりも根強い可能性が示唆された。豪10～12月期賃金指数は10年ぶりの高水準となり、依然としてインフレ圧力の火種が消えてはいない。豪1月失業率が前月比で+0.2%と上昇した点においては、リファレンス期間が年初2週間という、労働者が比較的少ない期間に設定されている事も起因する為、こちらは2月雇用統計の結果で再評価が必要となる。この他、多くの固定住宅金利ローン支払い者が今年後半に高金利へのリセット期間を迎えるが、住宅ローン返済額が多くなっても収入は変わらない家計はできる限り支出を抑えようとする傾向が出てくることが予想される。デマンドサイドが弱含むことにより、インフレ圧力緩和が期待できるため、金融政策引き締め過ぎることなく景気後退しない程度の金融制約度の匙加減が重要になってくる。

直近のデータに基づいて、このような背景に鑑みると3月は米国がよりタカ派に傾斜する可能性が高いとみるため、豪ドルは軟調に推移すると推察する。ちなみに豪ドルの過去5年間のシーズンリティを見ると3月は去年を除いて、月末に向けて下落する傾向にある。

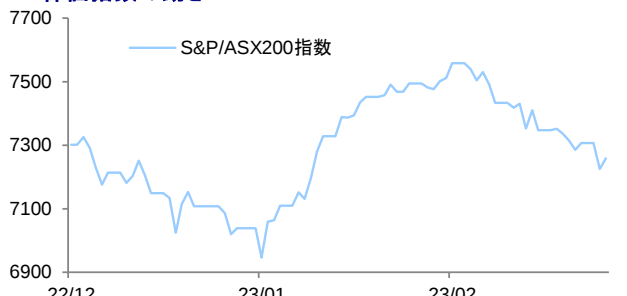
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/2	住宅建設許可件数(前月比)	12月	1.00%	18.50%	-8.8%
2/7	貿易収支	12月	A\$12450m	A\$12237m	A\$13475m
2/7	RBAキャッシュレート	-	3.35%	3.35%	3.1%
2/10	RBA金融政策四半期報告	-	-	-	-
2/16	正規雇用者数変化	1月	-	-43.3k	14.4k
2/16	非常勤雇用者数変化	1月	-	31.8k	-34.3k
2/16	参加率	1月	66.6%	66.5%	66.6%
2/21	RBA議事録要旨発表	2月	-	-	-
2/22	賃金指数(前年比)	4Q	3.5%	3.3%	3.2%
2/28	小売売上高(前月比)	1月	1.5%	1.9%	-3.9%

カナダドル相場

予想レンジ:

USD/CAD	1.3000	~	1.3800
CAD/JPY	96.00	~	103.00

米州資金部カナダ室 柏木 広樹

■ 先月の為替相場

1月はUSD/CADの下落トレンドが続いたが、2月は月初から米国の相次ぐ予想を上回る経済指標に、他の主要通貨と同じく対CADでもUSDが買われた。USD/CADは月初の2日に安値1.3264を付けた後、月末にかけて上昇する展開が続いた。

月初、USD/CADは1日に11月半ば以来となる1.33を割込み、翌2日にはFOMCでのパウエルFRB議長発言が予想ほどタカ派でなかったことからUSDが売られ、一時1.3264まで下落。しかし3日に発表された米1月雇用統計と米1月ISM非製造業景況指数は予想を大きく上回り、米景気の底堅さが意識され、USD/CADは一転して1.3475まで大きく上昇した。

また月初にはカナダ・米国ともに中銀トップの動向にも注目が集まった。7日にカナダ中銀のマックレム総裁がスピーチで過度な景気減速を避けるために利上げを停止した経緯について言及し、8日にはカナダでは初めて政策会合の審議内容を一般に公開する試みも行われた。一方、米国では7日にパウエル議長がインタビューでディスインフレーションの兆候について言及し、それに反応してUSD/CADは8日に1.3361まで反落する動きとなった。

月半ばにかけては、米国で予想を上回る経済指標の発表が相次いだことでUSD/CADは上昇する展開となった。10日に発表されたカナダの1月雇用統計が米国と同様に予想を上回る強い内容となり、失業率も5.0%と歴史的な低水準となった。それに反応して一時はCAD買いが強まりUSD/CADは1.33台前半まで下落する場面はあったが、その後14日の米国CPI発表でインフレ圧力は依然として強いことが確認され、15日の米1月小売売上高、さらに16日の米1月PPIも底堅い内容となったことからUSD/CADは1.3479まで上昇した。

月末にかけては、FRBが利上げを継続することへの警戒感が高まり金利が上昇する中で、USD/CADは上昇する展開となった。また21日にカナダ1月総合CPIが予想以上に伸びが減速したこと、同じく予想を上回った21日の米1月PMI、24日の米1月PECデフレーター発表などもUSD/CADの上昇材料となった。

■ 今月の見通し

カナダ中銀は先月25日に、過度な景気後退を避けこれまでの金融政策効果を見極めるため、一旦利上げの打ち止めを表明している。一方でFRBは、2月1日のパウエル議長の会見で、あと数回の利上げを行うことを表明した。3日の米1月雇用統計の発表以降、両者の利上げスタンスの差は2年債利回り差(スプレッド)に反映されてきている。

実体経済面では、景気動向、インフレ、雇用環境等など足元で発表される経済統計は米国と同様の傾向が見られる。21日に発表されたカナダの1月CPIは、総合では前年比+5.9%(前月同+6.3%)へ低下、コアCPIも前年比+5.0%(前月同+5.2%)と小幅ながら低下。また1月の失業率は5.0%(前月同5.0%)と雇用は歴史的にも逼迫している状況が続いている。

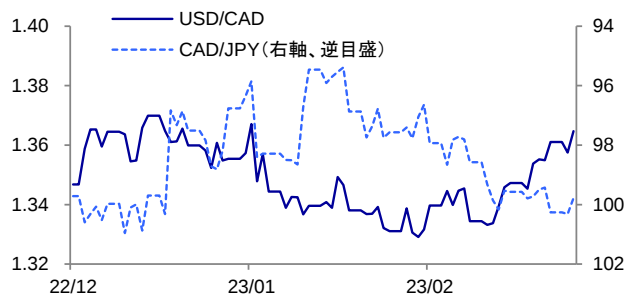
今月の見通しであるが、カナダ中銀が次回3月8日の政策会合にて表明どおり政策金利を据え置くのであれば、FRBの金融政策の動向や、米国経済がリセッションに陥らずにソフトランディングできるかどうかが焦点となり、主にUSD/CADは米経済指標や米国金利の動きに左右される展開になると考える。3月のUSD/CADレンジを1.3000~1.3800と予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で有名なインフルエンサー』
ジャスティン・ビーバー、アヴリル・ラヴィーン、セリーヌ・ディオンなどカナダから世界的にブレイクをしたアーティストは意外に多いのですが、カナダで影響力がある人物を挙げるとすれば、ラッパーのドレイクを選ばれる方は多いのではないのでしょうか。ドレイクは1986年にアフリカ系アメリカ人の父親とユダヤ系の母親のもとでカナダのトロントにて生まれました。当初は、俳優からキャリアをスタートしましたが、2010年に音楽アーティストとして公式デビューしてからは何度もアルバム全米1位を獲得し、北米を代表する不動のアーティストの1人となっています。今やその活躍は、音楽業界だけに留まらず、レストラン事業、アパレル事業など様々なシーンにおいて、起業家・ビジネスマンとしても活躍しており、多方面から注目をされている存在です。

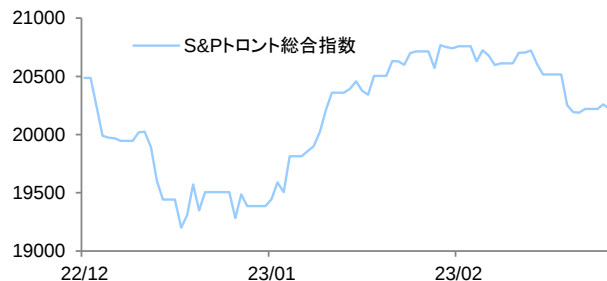
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	S&P Global カナダ製造業PMI	1月	-	51.0	49.2
2/10	ネット雇用変化	1月	15.0k	150.0k	69.2k
2/10	失業率	1月	5.1%	5.0%	5.0%
2/17	鉱工業売上高(前月比)	1月	-0.1%	0.4%	-0.9%
2/21	CPI(前年比)	1月	6.1%	5.9%	6.3%
2/21	CPI(前年比)	1月	6.1%	5.9%	6.3%
2/21	小売売上高(前月比)	1月	0.5%	0.5%	0.0%
2/28	GDP(前月比)	12月	0.0%	-0.1%	0.1%
2/28	GDP(前年比)	12月	2.7%	2.3%	2.8%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1290 ~ 1360
 KRW/JPY 10.000 ~ 10.638
 JPY/KRW 9.400 ~ 10.000

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

2月のドル/ウォン相場は大幅な上昇となった。2月1日のドル/ウォンは1,232.0にてオープン。1月韓国貿易収支(結果:▲126.9億ドル、予想:▲92.7億ドル)は悪い結果となったものの、ドル/ウォンへの影響は限定的。FOMC(2日未明)ではパウエルFRB議長によるハト派的な発言によりドル売りが進行したことでドル/ウォンは月安値1,216.4まで下落。しかし、ECBが+50bpの利上げを実施し、3月も+50bpの追加利上げを示唆すると、インフレ鈍化期待が後退しドル/ウォンも上昇した。3日海外時間発表の非常に堅調な米雇用統計を受けて、週明け6日のドル/ウォンは1,247.5まで上昇してオープン。序盤こそ水準感から実需のウォン買いが入ったものの、インフレ鈍化期待に賭けていた海外投資家勢からは韓国株売りを浴びせられ、週を通じてドル/ウォンは35.8ウォンの大幅上昇となった。翌週に入ってもドル/ウォンの上昇は収まらず。14日の米1月消費者物価指数(CPI、結果:前年比+6.4%、予想:同+6.2%)、16日の1月米生産者物価指数(PPI、結果:前月比+0.7%、予想:同+0.4%)が相次いで市場予想よりも強い結果となると、ドル/ウォンはさらに大きく上昇する展開となった。17日には節目の1,300を回復すると、当局からの為替介入と思われる動きも見られたことから、ドル/ウォンは徐々に落ち着きを取り戻す結果に。その後暫く1,300を中心に推移していたものの、24日海外時間に堅調な米経済指標が相次いで発表されると、米金利が大きく上昇する中、ドル/ウォンも月高値1,326.6まで上昇した。結局、前月比90.7ウォンした1,322.6にてクローズ。

■ 今月の見通し

3月のドル/ウォンは底値を固める展開を予想する。

3月のドル/ウォンに影響する主な材料は以下の2点。
 ①インフレ推移とFRBによる金融政策②BOKによる金融政策

①1月迄見られていたインフレ鈍化に期待するドル売りの流れは落ち着き、足許の経済指標に一喜一憂する展開となっている。3月FOMCは未だ+25bp利上げが市場コンセンサスではあるものの、インフレ指標がさらに反発するようであれば今以上に+50bp利上げの期待が広がるリスクシナリオには一定の注意を払うべきだろう。ドル売りポジションへの偏りやFRBのスタンスを考えると、今しばらくドルが強い状況が続くのではなかろうか。

②2月23日にBOKは政策金利(3.5%)を据え置き。足許の景気認識やインフレ見通しは前回会合から変化なく、今後政策金利を引き上げる可能性は低いといっている。さらに足元のドル/ウォン相場についても注視するとの発言にとどめており、1,300台のウォン安は当局にとって許容範囲になりつつある。かかる状況下、BOK金融政策からくるウォン買い圧力は限定的なものに留まろう。

そのほか12月末の韓国系企業による配当が本格化する3、4月はアノマリーとしてウォン安になりやすい(外国人投資家がウォン建て配当金をドル転するため)。さらに外国人投資家による韓国株買いも収まっており、貿易赤字も定着気味であることを考えるとウォン買いを行う材料が特段見当たらないといつて過言ではないだろう。

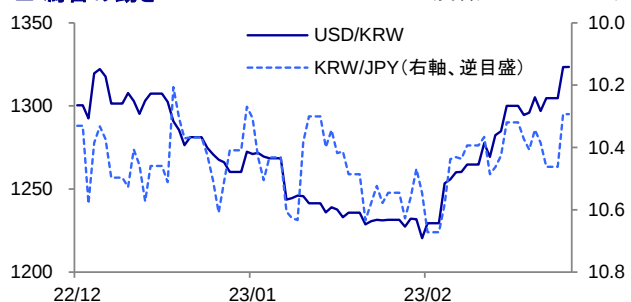
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で有名なインフルエンサー』

当地で有名なインフルエンサーとしては、BTSやTwice等が想像されますが、今話題は田中さんでしょうか。田中さんは日本で売れなかったホスト(日本ではRolandが経営していた店で働いていたそうです)という設定で韓国では爆発的な人気を誇るYoutuber(コメディアン)になります。日本人っぽい韓国語のイントネーションでしゃべり、歌舞伎町で苦労した話題を話し、イケメンと韓国語で書いた帽子をかぶっている田中さんは、小さい子供から大人までみんなチェックしている話題の人になっています(ちなみに、田中さんのお父さんは「たなか キャベジン」、お母さんは「たなか おおたいさん」だそうです。お母さんは「みずほ」にしてほしかった。。。)。あくまでも韓国語メインのYoutuberになるので、ギャクセンスも含め日本人には難しい部分もありますが、彼が活躍することで日本に対するイメージが少しでもよくなることを祈っております。なお、田中さんは今度のWBCでの日韓戦を見に来日し、日本と韓国を応援するそうです。もしかしたらテレビに映るかもしれませんので注目してみてください。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
2/1	貿易収支
2/1	輸出(前年比)
2/1	輸入(前年比)
2/2	CPI(前月比)
2/15	失業率
2/21	消費者信頼感
2/23	PPI(前年比)
2/23	BOK政策金利発表

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
1月	-9,273M	-12,690M	-4,774M
1月	-11.1%	-16.6%	-9.7%
1月	-2.6%	-2.6%	-2.5%
1月	0.7%	0.8%	0.2%
1月	3.3%	2.9%	3.1%
2月	-	90.2	90.7
1月		5.1%	5.8%
1月	3.5%	3.5%	3.5%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.00 ~ 30.80
TWD/JPY 4.30 ~ 4.45

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

2月のドル/台湾ドルは約7か月ぶりの台湾ドル高水準をつけるも、その後反発。

月初の2月1日は30.050でオープン。先月からの外国人投資家の台湾株買いが続き、30台を割り込み、2日には前日のパウエルFRB議長の会見を受け、ドル安の流れに。輸出企業もドル売りに入ると、一時29.658まで下落し、約7か月ぶりの台湾ドル高水準をつけた。しかし、米1月雇用統計が好調であったことから雇用環境は底堅く、インフレの長期化が警戒され、米金利上昇・米株安・ドル高で反応すると、台湾株安・台湾ドル安の流れに。7日には30台に戻したが、その後も台湾株が軟調に推移する中、外国人投資家のドル売りが優勢な状況が続いた。

月央に入っても、米国の利上げ継続観測が高まる中、ドル高台湾ドル安の流れが続いた。14日に発表された米2月消費者物価指数(CPI)も米国の利上げ長期化懸念を強める結果となり、翌日15日にはドル/台湾ドルは30.3台まで上昇。台湾株が反発すると台湾ドルが買われる場面も見られたが、その後も底堅く推移した。

月後半に入ると、米国休場もありレンジで推移していたが、米2月製造業/サービス業PMI(速報)の結果や米大手小売り企業の決算が予想を下回ったことから米株式市場が下落したことを受けて、台湾株も売られると22日には30.5台に乗せ、一時30.534まで上昇。その後は台湾株の下落も落ち着き、台湾ドルは買い戻され、30.4台で推移した。

■ 今月の見通し

3月のドル/台湾ドルは上昇を見込む。

2月は、米国の利上げ継続懸念が再燃したことで、米金利の上昇により株安ドル高の流れとなった。台湾ドルについては実需ベースの取引しか行えないため、株安(外国人投資家の台湾株売り)の影響を受けやすく、昨年は台湾株安・台湾ドル安の流れが強かった。しかし、2月については台湾ドル安となったものの、台湾加権指数は前月比プラスで終え、外国人投資家は台湾株を買い越したため、台湾株の動向より米金利の上昇(台湾域内から海外への投資等)の方が影響が強かったとみられる。

3月についてもドル/台湾ドルは米国の金融政策の動向に大きく左右されるであろう。2月は米雇用統計の他、物価、個人消費等強い経済指標が示され、根強いインフレと利上げの継続観測が強まっており、3月のFOMCに注目が集まっているが、インフレ退治のためにタカ派なスタンスを示せばドル高となるであろう。

なお、台湾についても3月は中銀の金融政策決定会合が開催される。CPIが+2%台で落ち着きように見られたが、1月は春節の季節的要因もあり、再び+3%台に上昇したため、3月も利上げを行うと見込んでいる。2022年は他国と比較して燃料価格のコントロール等により上昇率を抑えこむことに成功していた。しかし、前年比の物価上昇率で考えると、昨年のロシアのウクライナ侵攻以降上昇したコモディティ価格が下落した影響を受けることは出来ず、むしろ、据え置いていた電気代の引き上げ等による物価の上昇圧力が強まる可能性の方が高い。台湾中銀の今後の物価見通しについても注視したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で有名なインフルエンサー』

当地の有名なインフルエンサーについて、各SNSで見ていることにします。

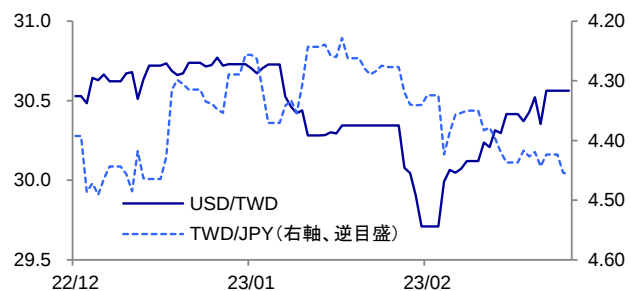
2022年のInstagramの1位のフォロワーは蔡依林(Jolin Tsai)。歌手で安室奈美恵ともコラボ曲を出したことのある方です。2位は欧陽娜娜(NANA OUYANG)。こちらもミュージシャンですが、専門はチェロ。母親は日本でも紅白歌合戦にも出場した欧陽菲菲です。3位は曾之喬(Joanne Tseng)。こちらも歌手ですが、俳優業等マルチに活躍されているタレントです。1〜3位いずれもミュージシャンですね。

YouTuberでは登録者数1位はJAYLEE。お絵描きYouTuberです。水彩画の描き方からユニークなものを使って絵を描く動画を配信しています。2位はPANPiano。ピアニストです。主に日本のアニメのコスプレをしながら、アニメの曲を弾いています。3位は阿神(AshanKouki)。ゲーム実況者です。主にMineCraftを取り扱っています。JAYLEEとPANPianonについては中国語が分からなくても見て十分に楽しめます。

なお、日本の有名人だとインリンがYouTubeで台湾生活を紹介しています。台湾への旅行に参考にされるのであれば、旅行YouTuberもいいですが、住んでいる人の情報も参考にしてみてください。

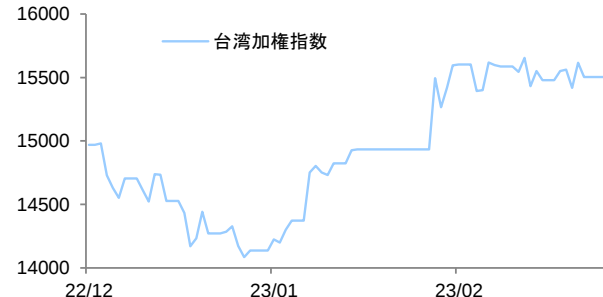
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/3	外貨準備高	1月	-	557.14B	554.93B
2/7	輸出(前年比)	1月	-20.3%	-21.2%	-12.1%
2/7	輸入(前年比)	1月	-18.2%	-16.6%	-11.4%
2/7	貿易収支	1月	3.89B	2.34B	4.79B
2/9	CPI(前年比)	1月	2.70%	3.04%	2.71%
2/20	輸出受注(前年比)	1月	-24.0%	-19.3%	-23.2%
2/22	失業率	1月	3.61%	3.60%	3.60%
2/22	GDP改定値(前年比)	4Q	-0.9%	-0.41%	-0.86%
2/23	鉱工業生産	1月	-11.25%	-20.50%	-8.00%

(資料) ブルームバーク

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8100 ~ 7.8500
HKD/JPY 16.50 ~ 17.70

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【2月の香港ドル直物相場】

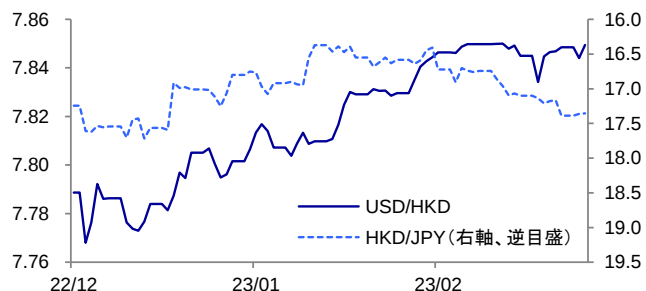
2月の香港ドル直物相場は、香港ドルの流動性が潤沢かつ香港ドルと米ドルの短期金利差が拡大したことを受けて、再びペッグ制の下限である7.85レベルまで弱含んだ。米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードのベンチマークとなるT/Nフォワードポイントは、一時▲8ポイントまで低下した。その後、香港金融管理局(HKMA)は11月以降初めてとなる香港ドル買い介入を実施し、2月合計で190億香港ドルを買い入れた。香港ドルのアグリゲートバランスが減少する中、市場参加者は香港ドルの流動性ひっ迫を懸念し、米ドル買い/香港ドルのキャリートレードのポジションを一気に巻き戻し、香港ドル直物相場は一時7.823の高値をつけた。その後、FRBの利上げが長期化すると懸念を受け市場参加者は米ドル/香港ドルのキャリートレードのポジションを再構築、香港ドル直物相場は再び7.85レベルに向かって軟化。また、香港政府は2023-24年度の財政予算案を発表。入境規制の緩和を既に実施したが、景気回復を促すために一定の刺激策を維持。ただし、個人を対象にした電子マネーの支給は昨年の1万香港ドルから半分の5千香港ドルに減額した。2022-23年度は1398億香港ドルの財政赤字を記録し、2022年のGDP成長率は前年比▲3.5%となり、構造的赤字への懸念を強めたが、米ドルと香港ドルのペッグ制への影響は特段認められないだろう。

【2月の香港ドル金利市場】

香港ドル金利はHKMAによる為替介入後に香港ドルの流動性が吸収されたことで底打ちし、上昇に転じた。14日に実施された介入は約148億香港ドルで昨年7月以来最大規模となり、香港ドルのアグリゲートバランスは前週の960億香港ドルから770億香港ドルに減少。低水準であった2019-2020年(約540億香港ドル)と比較すると、金融機関の香港ドル流動性ひっ迫に対する備えは十分でなく、香港の銀行は銀行間市場で過剰な香港ドルの流動性を提供することに慎重になっている。さらに、中国政府による海外IPO規制の緩和を受け香港市場のIPOが活気づくことが想定され、3月には香港ドルの流動性が一段とひっ迫すると予想される。このため、香港ドルHIBORは1か月物が2.1%、3か月物が3.4%まで一時低下したが、その後2.9%、3.8%へと持ち直した。FRBは政策金利をより長期にわたって高く維持すると予想されるため、香港ドルスワップ金利は米ドルのスワップ金利に比例して上昇し、3年物と5年物金利はそれぞれ4.4%と4.2%に上昇した。

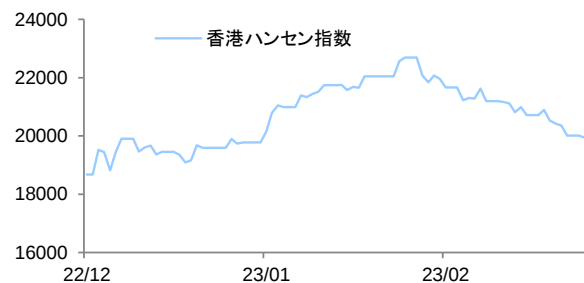
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で有名なインフルエンサー』

新型コロナウイルスによる行動制限によって、香港の多くの人は家に閉じこもり、より多くの時間をネット動画視聴に充てるようになった。そのため、今日では香港でもユーチューバーの影響力和人気が高まっている。香港のユーチューバーのトップ10のうち、1番目と2番目はヨガの学習とフィットネスに関するコンテンツを配信している。これは、健康大国と言われる香港の人々が最近、インターネットでもフィットネスやヨガなどに注目していることを示している。その他のトップチャンネルは料理、グルメ、ゲームなど取り扱っている。このようなコンテンツは、香港の人々の日常生活やライフスタイルを正確に表している。例外的に、ニュースや政治を分析するチャンネルも注目されるが、興味深いことに、そのチャンネルに関連する最も有名なことは、その分析と予測の不正確さにある。

■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	GDP(前年比)	4Q A	-2.9%	-4.2%	-4.5%
2/1	GDP(季調済/前期比)	4Q A	2.0%	0.0%	-2.6%
2/3	S&P Global Hong Kong PMI	1月	-	51.2	49.6
2/3	小売売上高(価額、前年比)	12月	-2.5%	1.1%	-4.1%
2/7	外貨準備高	1月	-	\$436.9b	\$424.0b
2/16	失業率(季調済)	1月	3.4%	3.4%	3.5%
2/23	CPIコンボジット(前年比)	1月	2.1%	2.4%	2.0%
2/27	輸出(前年比)	1月	-27.6%	-36.7%	-23.5%
2/27	輸入(前年比)	1月	-23.1%	-30.2%	-23.5%
2/27	貿易収支(HKD)	1月	-17.0b	-25.4b	-\$51.6b

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.7000 ~ 7.1000
CNY/JPY 18.30 ~ 20.45
100JPY/CNY 4.8900 ~ 5.5500

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉 小絵

■ 先月の為替相場

USDCNYは6.70台から6.97台へ急上昇。

ドル人民元(USDCNY)は1日に6.75近辺でオープン。FOMC後のパウエル議長会見でインフレに対する見方がハト派化したことでドル全面安の展開となって、2日のオンショアオープンで6.70近辺をつけた。週末にかけては値を戻す展開となり、3日の米1月雇用統計が予想を上回る強い結果となったことで、6.80レベルまで水準を切り上げて上昇した。

6日は6.80近辺でオープン。本週はイベント通過で材料に乏しく、6.77～6.80のレンジで横ばい推移となった。

13日は6.83台半ばでオープン。週前半は米1月CPIを控え上値重く推移し6.80台まで下落したが、14日発表の米1月CPIや15日発表のPPI、新規失業保険申請件数が堅調な結果となったことでインフレ長期化懸念が強まり米金利上昇・ドル高が進行。週後半にかけては中国の内需拡大支援策期待や中国株の調整なども元安のサポート要因となり、USDCNYは17日には6.88台まで上昇。

20日に6.86台後半でオープン。20日は前週末に下落調整した中国株の株高調整を横目に元高の流れとなり6.85近辺まで下落。その後はFRBの利下げ見通し後退を背景とした米金利上昇・ドル高にUSDCNYも上昇基調を再開。週半ばは6.90手前で上昇一服が見られたものの、23日夜間には6.90を上抜け、24日には年初来高値を更新。

週明け27日午前現在、一時6.97台まで上昇している。

■ 今月の見通し

短期的にはアップサイドに警戒も、長期的なドル安元高要因は健在。

米国では堅調な経済指標を背景としたFEDのタカ派化の思惑がドル買いにつながっている。残りの利上げ回数の予測が引き上げられたことによってドル高が進んでおり、3月21-22日に開催のFOMCに向けて、経済指標に一喜一憂しながらも堅調な指標が多ければドル買い優勢の相場が継続する可能性には留意したい。但し、利上げのピークアウトや利下げの方向性は不変であるため、長期的にはドル売り局面に戻ると考える。

一方、中国サイドでは年初から続いたゼロコロナ政策修正に伴う景気回復期待が一服したようにも見える。例年2月は春節の影響で主要経済指標の発表が少なく、3月に1月・2月分が纏めて発表されることから、現時点ではゼロコロナからの経済回復がデータで確認されていない状況。3月中旬に発表される主要経済指標が軟調な数字が続いた場合、「長期的には元高」というドル人民元相場のトレンドが大きく崩れる可能性がある。一方、堅調な数字となった場合、現在の元安方向の動きが反転する可能性が高く、いずれの場合にもボラティリティの高まりには警戒したい。3月5日から開催を控える全国人民代表大会では現状の経済認識や成長率目標等に注目したい。

他、国境開放に伴う海外旅行需要拡大(→サービス収支赤字拡大)や不動産セクターを中心とした景気刺激策、地政学リスクは元安要因となる一方、人やモノの移動が戻ることに伴う内需拡大や、中国国内インフレリスク、外国人投資家による株・債券市場への資本流入は元高要因となる。

USDCNYは6.90を上抜けたことから心理的節目である7.00が意識されており、全国人民代表大会、中国国内主要経済指標、米FOMCといったイベントを受けたボラティルな相場展開に警戒も、中長期的には引き続き中国における景気回復およびFED利上げピークアウトに対する見方がUSDCNYの上値を重くすると予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で有名なインフルエンサー』

中国ではインスタグラムやTwitterといったSNSよりも、小紅書(xiaohongshu・Red)や抖音(douyin・TikTok)、微博(weibo)といった日本では馴染みの薄い媒体で活躍しているインフルエンサーが多いです。有名な方はたくさんいますが、その中で今回は2名ご紹介したいと思います。

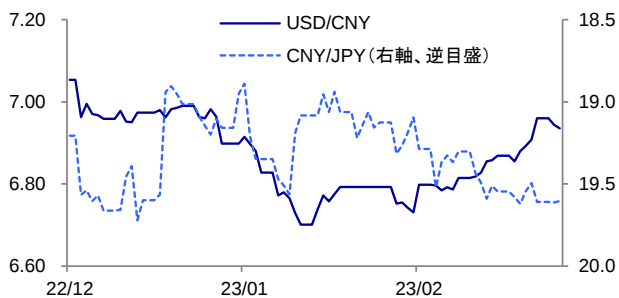
1人目は孫一寧(Sun Yining)です。彼女は見た目はおしゃれで可愛いインフルエンサーなのですが、自身が整形していることを公表したり、発言がサバサバしていたり、問題を起こし謝罪したりと、かなり「炎上系」のインフルエンサーです。2人目で紹介する王思総から口説かれた、ということを暴露していたこともあるようです。

2人目は王思総(Wang Sicong)という大富豪系インフルエンサー。彼の父親は万達集团という不動産会社の社長です。彼はSNS上で歯に衣着せぬ発言が多く、そのセレブっぷりがわかる投稿と合わせて人気があり、「国民老公＝国民皆の旦那さん」と言われたこともあるようです。ただ、女性関係の話題もこと欠かぬようで、前述の孫一寧の他、日本のとある女優Hさんとの関係も報道されたことがあります。

かなり王道ではない内容になってしまいましたが、他にも多くのインフルエンサーがいますので、是非調べてみてください！

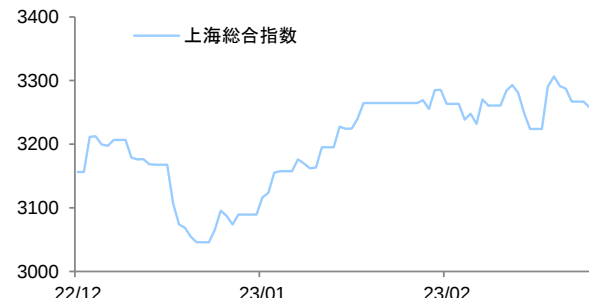
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/31	製造業PMI	1月	50.1	50.1	47.0
1/31	非製造業PMI	1月	52.0	54.4	41.6
2/1	財新・製造業PMI	1月	49.8	49.2	49.0
2/3	財新・非製造業PMI	1月	51.0	52.9	48.0
2/10	PPI(前年比)	1月	-0.5%	-0.8%	-0.7%
2/10	CPI(前年比)	1月	2.1%	2.1%	1.8%
2/15	MLF1年物	-	2.75%	2.75%	2.75%
2/20	LPR1年物	-	3.65%	3.65%	3.65%
2/20	LPR5年物	-	4.30%	4.30%	4.30%

(資料) ブルームバーグ

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3050 ~ 1.3780
SGD/JPY 97.00 ~ 104.00

アジア・オセアニア資金部 森谷 友一

■ 先月の為替相場

2月のUSD/SGDは大きくUSD高が進行する展開となった。

月初1日にUSD/SGDは1.31台前半で取引を開始すると海外時間に実施されたFOMC後にパウエルFRB議長が「ディスインフレのプロセスが始まっている」発言したことを受けドル安が進行。翌2日にはドル売りの流れを受け一時月安値となる1.30台前半まで下落するも3日に公表された米1月雇用統計、米1月ISM非製造業景気指数の上振れを受け1.32台前半まで急反発。その後はしばらく1.32台を中心とした方向感に乏しい推移が続いたが、10日に発表された米2月ミシガン大学消費者マインド(速報)の上振れを受けドル高が進行すると1.33台に乗せる展開となった。

13日、前週から続くドル買いの流れに加え、シンガポール10～12月期GDPが市場予想比下振れたことも重なり続伸。その後失速し14日には一時1.32台前半まで落ち込む局面もあったがFRB高官からタカ派発言が相次いだことや米国で良好な経済指標の結果が確認されたことから再びドル買いの流れが強まると17日には一時1.34台前半まで上昇する展開となった。

20日は前週のドル高の反動で下押しする局面もあったがドル売りの流れは一時的なものにとどまりその後は1.34ちょうどを挟んでの底堅い推移に。23日に発表されたシンガポール1月消費者物価指数(CPI)の結果が市場予想を下回ったこともSGD売り材料として意識される中、24日には1.34台半ばまで上昇する展開となった。25日は米1月個人消費支出(PCE)デフレーターが市場予想を上回る結果となるとドル買いが強まり一時1.35台前半まで上昇した。その後も1.34台後半から1.35台での底堅い推移が続いている(27日時点)。

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGD相場は底堅い推移を予想。

昨年10月以降、USD/SGD相場は大きな反発局面もなく一方向的にUSD安、SGD高が進んできたが先月はその流れが一服し反発する展開となった。昨年10月以降の動きについてはMASによる金融政策の影響もあるとは考えられるものの、主な要因となっていたのはFRBに対する利上げ打ち止め観測を背景としたUSD安であったとの認識。しかし、2月に入り米国のインフレ高止まりを示唆する経済指標の結果が相次いだことに加え、FRB高官からタカ派発言が続いたことを受けて利上げ長期化に対する警戒感が高まっている状況。実際の残りの利上げ回数については今後の経済指標の結果を見極める必要があるものの、FRB高官から利上げ継続を示唆するコメントが目立つ中では早期利上げ停止を織り込みに行く動きは控えられるやすい地合いになっていることが想定され、ドル売りの流れは限定的となりそうだ。

SGDサイドの要因に目を向けてみると、1月CPIの結果は+6.5%(前年比)と高止まりが見られるのは事実だが上昇速度にはピークアウトの兆しもある。昨年MASは政策バンドの傾斜の引き上げと中央値引上げを複数回に渡って実施し強いタカ派姿勢を示していたが、過度な懸念は和らいでいるとはいえグローバル景気減速懸念も意識される中では更なる引き締めには慎重な動きとなると思惑もあると見られる。次回MAS会合が4月であることも勘案するとSGDを積極的に買う材料には乏しい状況と考えている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で有名なインフルエンサー』

私はインフルエンサー事情に疎いためナショナルスタッフの方にいろいろと聞いてみましたが、シンガポールにおいても日本同様にファッション、美容、食事、旅行等の様々なジャンルにおいて、個性的で魅力あるインフルエンサーが次々と増えており人気を集めているようです。シンガポールで最も有名なインフルエンサーの一人がXiaxue。彼女は2003年からブログを始め、その後Instagramで60万人以上のフォロワーを獲得しています。独特なユーモアのセンスで人気を集めておりファッションや美容業界のブランドや企業とのコラボレーションもよく行っています。

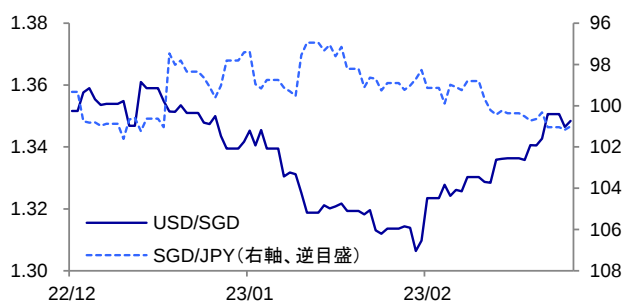
食事やライフスタイルのコンテンツに興味がある人にとって、人気のあるインフルエンサーの一人がSeth Luiです。彼は食事に関するブログとInstagramアカウントを開設しており、シンガポールで人気の食べ物や飲み物のレビューやおすすめ情報を発信しています。Instagramでは20万人以上のフォロワーを獲得しております。

その他、ライフスタイルや美容に関するコンテンツで知られるNaomi Neoや、フィットネスライフスタイルで知られるJamie Pangなども、シンガポールで注目のインフルエンサーとのことです。

今回、当地のインフルエンサー事情について聞いたことをきっかけに私自身もいろいろとインフルエンサーをチェックしてみたいと思います。

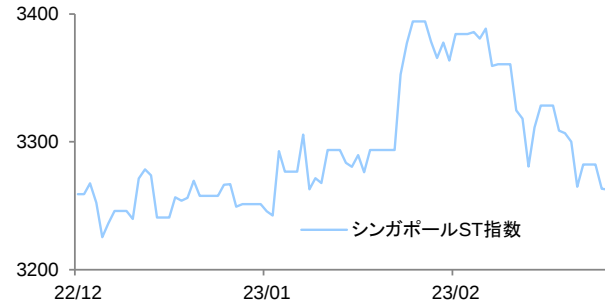
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/3	小売売上高(前年比)	12月	5.8%	7.4%	6.5%
2/13	GDP(前年比)	4Q	2.3%	2.1%	2.2%
2/17	非石油輸出(前年比)	1月	-21.9%	-25.0%	-20.6%
2/23	CPI(前年比)	1月	7.1%	6.6%	6.5%
2/24	鉱工業生産(前年比)	1月	0.8%	-2.7%	-2.6%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 34.40 ~ 35.50
THB/JPY 3.80 ~ 3.95

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 末廣 純太

■ 先月の為替相場

2月のドルバーツ相場は大きく上昇。33バーツちょうど付近で取引を開始。月初、注目を集めたFOMCでは市場予想通り25bpsの利上げを決定。今後数回の利上げが示唆されたものの、声明文やパウエル議長の会見内容がハト派と捉えられ、金利低下、ドル安で反応。ただ、3日に発表された米1月雇用統計が予想以上に強い米労働市場を示すこととなり、FRBが金利到達点を引き上げるのではないかと懸念から、アジア通貨がドルに対してほぼ全面安となると、32バーツ台後半で推移していたドルバーツは33バーツ台後半まで反発。その後は同水準でしばらく方向感乏しく推移した。10日に日銀黒田総裁の後任に植田元日銀審議委員が起用されるとの報道を受け、一時下落する場面を見せるも、水準を変えるには至らず。

中旬、14日に発表された米1月CPIの結果を受け、米利上げ長期化を巡る懸念からドルバーツは上昇。節目の34バーツを突破すると、その後も市場予想を上回る米1月PPIやFed高官のタカ派発言を受けてドル高が進行。34バーツ半ば付近まで上昇し、年初からの下落をほぼ取り戻す格好となった。

下旬に入ってもドルバーツは底堅さを維持。一連のドル高に加え、17日に発表されたタイ第4四半期GDPが市場予想を大きく下回ったこともドルバーツを支える展開となった。また、22日に公表された2月のFOMC議事録ではタカ派なトーンは維持されていることが確認されるも、足もとの市場にはすでに十分にFedのタカ派な姿勢が織り込まれていたためか、相場へのインパクトは軽微なものに。しばらく35バーツ手前での推移が継続する展開となるも、24日、米国経済指標の堅調な結果が確認されるとドルバーツは再び上昇。27日の本稿執筆時点では35バーツ台に乗せる展開となっている。

■ 今月の見通し

3月のドルバーツ相場は、米国経済指標の動向に振られる展開を想定。2月3日の米1月雇用統計以降、CPI・PPIの物価関連指標を含め、市場予想対比強い米国経済指標やFed高官のタカ派的なコメントにより為替や金利市場で大きく調整が進んでいる。市場ではすでに3月、5月、6月のFOMCにおける0.25%の利上げをほぼ織り込んでおり、年初と比較して対ドルで一時的約5%の上昇を見せたバーツが、2月でその上昇分を全て吐き出す状況となっていることを勘案すれば、一旦はドルバーツ相場も上昇の勢いは落ち着きを見せよう。ただ、足もと、4%手前で足踏みしている米長期金利等、米国経済指標の動向次第ではまだドル高方向へのリスクも相応に残っているように見え、警戒が必要な状況は続きそうだ。

また、気になるのはタイ経済の動向である。2月17日に公表されたタイ第4四半期GDPは前期比で▲1.5%、2022年通年(前年比)では2.6%となり、前年(1.6%)から成長率は拡大したもの、市場予想(3.2%)を下回っている。要因として、輸出の鈍化が挙げられ、欧米を中心に外需が振るわない中、10月・11月・12月とタイの輸出は前年を下回る結果が続いている。2023年は世界的に更なる景気減速が想定されている中、急回復を見せる観光セクターでどれだけカバーできるかが重要となるが、タイ運輸省によれば2023年1月のタイ入国者数は約235万人と観光業の回復は引き続き順調であり、それに伴い消費者マインドの改善も見られている状況。係る中、タイ中銀の動向に注目が集まる。金利の引き上げはせっかく改善しつつある消費者マインドを冷やしかねないものの、観光業回復に伴うインフレ圧力の高まり、米国利上げ継続懸念の台頭は無視できない。3月は29日にタイ中銀によるMPC開催が予定されており、これまでの当局者の発言等に鑑みれば0.25%の利上げが想定される。利上げ自体はこれまで同様、相場への影響は限定的となろうが、景気動向に係る中銀の解釈には注目をしておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で有名なインフルエンサー』

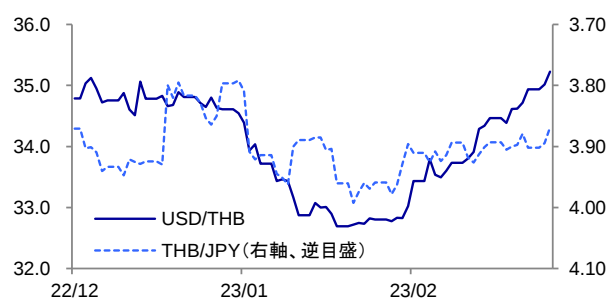
先日、タイにおけるインターネット利用時間についてのニュースを見る機会があった。その報道によれば、16～64歳の1日あたりのネット利用時間は8時間6分だったとのこと。タイのインターネット利用時間は、世界でもトップクラスに多いとされている。また、インターネット利用時間もさることながら、タイは多くの方がSNSを利用するSNS大国でもある。タイの国民性として、リスクを嫌う傾向が強く、何かモノを買う際にはインターネット上のレビューや、紹介動画等を参考にする傾向があるとされている。そのため、タイにおけるインフルエンサーの影響が大きいであろうことは想像に難くない。

タイにおいて、多くのフォロワーを擁するトップレベルのインフルエンサーとなると、モデル・俳優・歌手など、有名人が多くなってくるが、大学生等の一般人が情報発信を行い、人気となっているケースも相応にあるという。当地スタッフからは、そのスタッフの友人がインフルエンサーとして情報を発信しており、結構な数のフォロワーを抱えているとの話を聞くことができた。

また、タイは日本人にも旅行先として人気の国ということもあり、現地に住む日本人がタイについての情報を発信しているケースも多く目にする。先日、当地の日本食レストランにて食事をしていると、たまたま某有名タイ情報発信系Youtuberを見かけることができ、ちょっと興奮したのはここだけの話である。

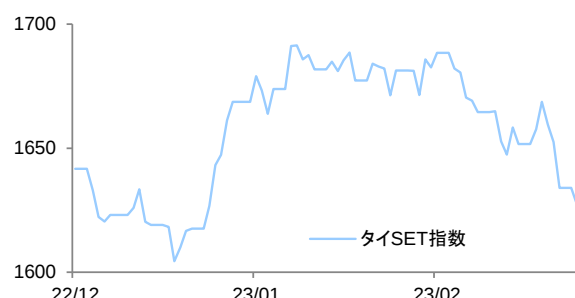
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/6	CPI YoY	1月	5.10%	5.02%	5.89%
2/6	CPI コア YoY	1月	3.10%	3.04%	3.23%
2/9	消費者信頼感指数	1月	-	51.7	49.7
2/17	GDP YoY	4Q	3.60%	1.40%	4.60%
2/17	GDP YoY	2022年	3.20%	2.60%	1.60%
2/21	自動車販売台数	1月	-	65,579	82,799

(資料) ブルームバーク

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.38	～	4.58
	MYR/JPY	30.03	～	30.77
	JPY/MYR	3.25	～	3.33

マレーシアみずほ銀行 内田 壘

■ 先月の為替相場

先月のリングgit相場は軟調に推移し、年初1ヵ月間で買い戻された分が先月1ヵ月でほぼ売り戻される所謂“行って来い”の展開となった。

上旬については、米国イベントで上下大きく振られる展開。2日FOMCでは大方の予想通り25bpの利上げを決定しFF金利誘導目標を4.50-4.75%とした。パウエルFRB議長は記者会見で「ディスインフレが始まった」旨の発言を繰り返し、発表後市場では利上げ停止観測が高まった。翌日のMYR市場は買い優勢でUSD/MYR4.2台前半で推移した。ところが3日NY時間に発表された米1月雇用統計では市場予想を大幅に上回る内容だったことからUSD/MYRは一気に4.3を中心としたレンジまで上昇。その後10日に発表された第四四半期GDPは、純輸出が+23.4%と全体を牽引する形で市場予想を上回る結果。通年ベースでは政府見通しのレンジ上限となる成長率。同時に発表された経常収支でも貿易黒字拡大や観光業の回復に伴うサービス収支の赤字幅縮小で経常黒字が拡大。市場反応こそ限定的ながらマレーシア経済の堅調さを確認する結果となった。

中旬はCPIや小売売上高などの堅調な米指標を材料にドル買いとなりUSD/MYRは一段上値を目指す展開。14日発表の米1月CPIは市場予想+6.2%に対して実績値+6.4%の強い内容。翌15日の米小売売上高も市場予想を上回り、インフレ高進下も消費拡大を続ける堅調さを見せる中、FF金利が長期間に渡り高止まりするとの見方が広がりとドル買いが進展。更に16日米PPIも市場予想を上回った他、前月値も上方修正されるとドルは一段高。フィッチはマレーシアのソブリン格付け“+BBB”、見通しを“安定的”に据え置き。GDPは長期に安定的成長が見込めるとし、23年は4.0%と伸び鈍化するものの、24年は4.8%まで伸長するとした。MYR相場の反応は限定的ながら長期的なMYR見通しにとって追い風となる内容。

下旬はFOMC議事録で改めてタカ派が確認され一段のドル高が進行し4.44半ばまで上昇。国内指標では20日1月貿易統計が輸出入共に市場予想を大幅に下回る内容。23年のマレーシア貿易に対する懸念が広がった他、23日の1月CPIは輸送や飲食や食品の落ち込みで物価高が若干緩和するなどまちまちの結果となった。

■ 今月の見通し

今月のリングgit相場は先の見通しづらい展開となりそう。3月は9日にマレーシア中銀の政策会合、23日に米FOMCが予定されており、両会合での利上げ有無は市場参加者間での最大関心事項となっている。

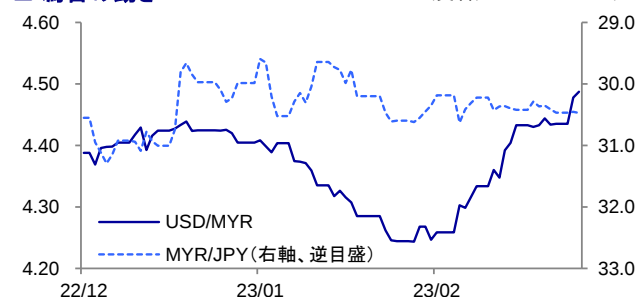
9日会合でBNMが利上げに踏み切るかは引き続き市場参加者間で意見が分かれている。先月24日に発表された1月CPIでは、市場の事前予想通り前年比+3.7%と国内物価上昇は昨年第三四半期をピークに鈍化傾向が再確認できた。一方、マレーシア経済を牽引してきた貿易動向に対してやや心配な材料が出て来ている。直近発表された貿易統計では、輸出が主力のE&Eこそ前年比プラスを維持したものの、あらゆる品目で前年比割れを記録。1月分のみの結果を以て判断することは拙速であるが、中国向けの輸出はそれ以前から既に落ち込みの兆しが見えていたことから、2月以降のデータは注意深く見ていく必要がある。馬中銀はこうした内容を踏まえて政策判断を行うことになるが、国内経済を支援する姿勢を見せる中、利上げ判断を急げば景気の腰折れを招く結果となる為、慎重な判断が求められる。一方、前回1月の政策会合では市場予想に反して金利据え置きを決定していることから、2会合連続での据え置きとなれば、利上げ休止のメッセージは一層市場で浸透することとなり、金利差拡大観測の高まりから、MYRの下値切り下げを試すことになりそう。

23日のFOMCでは既に25bp利上げが完全に織り込まれる状況下、10日の米2月雇用統計、14日の米2月CPI内容次第では、50bp利上げに向かう可能性もあると見ている。一段のドル利上げが織り込まれればUSD/MYRの上値目途4.58を上回る可能性が出て来ることから注目したい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

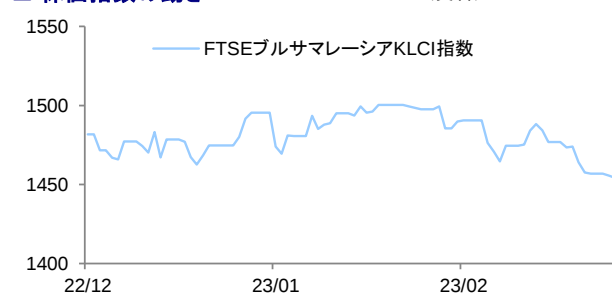
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/7	Industrial Production	Dec	4.2%	3.0%	4.8%
2/9	Foreign Reserves	31-Jan		\$115.2B	\$114.9B
2/10	GDP Annual YoY	2022	8.6%	8.7%	3.2%
2/10	GDP YoY	4Q	6.7%	7.0%	14.2%
2/10	BOP Current Account	4Q	14.9B	25.7B	14.1B
2/20	Import	Jan	9.6%	2.3%	12.0%
2/20	Export	Jan	9.0%	1.6%	6.0%
2/22	Foreign Reserves	15-Feb		\$114.4B	\$115.2B
2/24	CPI YoY	Jan	3.7%	3.7%	3.8%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 15000 ~ 15500
 IDR/JPY 0.8772 ~ 0.9091
 JPY/IDR 110.00 ~ 114.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 綱島 正侑記

■ 先月の為替相場

2月のルピアは下落。

1日、ドルルピアは15000で取引を開始。発表されたインドネシアの1月CPIの結果は前年同期比+5.28%となり、前回12月分から小幅に低下。先月、インドネシア中銀会合後にペリー総裁から発せられた「インフレターゲット達成に現状金利水準は十分」とのコメントを裏付ける内容となり市場の反応は限定的。海外時間に入り発表されたFOMC会合の結果がハト派的と受け止められ、市場はドル売りで反応。翌2日のルピアはドル売りの流れを受け14800台半ばまでルピア高が進行して取引を開始。アジア時間午前こそドル売りが優勢となる中でルピアは対ドルで堅調に推移したが、同水準ではルピア売り意欲もあり引けにかけては小幅に反落。3日もややルピア売りが優勢となる中、14900近辺までルピアは下落。海外時間に入り発表された米1月雇用統計の結果は市場予想を上回る良好な結果となり、翌週6日のドルルピアは前週末対ドル高ルピア安となる15000近辺で取引を開始。アジア時間日中も、前週末からのドル買いの流れが継続する中、ルピアはじり安で推移。発表されたインドネシア第四四半期GDP成長率は5.01%となり事前の市場予想(+4.92%)対比良好な結果となったが、市場の反応は限定的。ドル買いの流れが継続する中、翌7日にはルピアは対ドルで15100台前半まで続落。この日発表されたインドネシア1月の外貨準備高は市場予想を上回る結果となったが反応は限定的。8日、インドネシアの1月消費者信頼感指数が発表され前回から改善し、昨年8月ぶりの水準となったが小幅にルピアが買われるも反応は一時的にとどまり、15100台前半でもみ合い推移。その後は15100台半ばから15200台前半でのレンジで方向感に欠ける展開が継続。16日にはインドネシア中銀政策決定会合において、政策金利を事前予想通り5.75%で据え置くことが決定された。会合後のペリー総裁のコメントにおいても前月同様、現状の金利水準がインフレ目標を達成するのに十分な水準とされた。24日海外時間に発表された米1月コアデフレータの結果が市場予想を上回る結果となったことを受けドル買いの流れが強まったことや、月末に係る実需のドル買い・ルピア売り圧力もあり15200台半ばまでルピア安が進展しクローズした。

■ 今月の見通し

3月のルピアは軟調な値動きを予想。

インドネシア中銀は1月会合での25bpsの利上げの後、2月会合においては事前に示唆されていた通り利上げを停止、政策金利である7日物リバースレポレートを5.75%に据え置くことを決定した。インドネシア国内のインフレ率はガソリン価格を改定した昨年9月期をピークに低下傾向を維持しており、中銀も今年後半にはインフレ率が目標水準である2-4%まで低下するとの見通しを示している中、再度インフレ率が上昇に転じない限りは更なる利上げは行わないと考える。他中銀に先駆けて利上げを停止させており、他中銀との金融政策差の観点からルピア安圧力が強まることが予想される。2月以降、米1月雇用統計を皮切りに市場予想対比良好な指標が発表される等、米景気後退懸念を払しょく、更には米インフレ高止まりが懸念される状況下、米金利上昇・ドル高の流れが継続し、ルピアは対ドルで軟調に推移するものと予想。加えて、インドネシアの主要な輸出品目である石炭価格は年初来、大幅に下落しており昨年初来、地政学リスクの高まりを背景に高止まりしてきた石炭価格を背景に貿易黒字を拡大させてきたインドネシアにとっては石炭価格の下落もルピア安要因となり得る。インドネシアの2022年通年での貿易黒字は過去最大を記録、2021年に引続き経常黒字をもたらし、特に2022年上半半にかけ他のアジア通貨対比ルピアの堅調な推移をサポートしてきた一因となっていた。しかしながら昨年秋口より石炭価格が下落したタイミングではルピア安が大きく進展し15700台を付けた経緯もあり、足元で再度石炭価格が下落している環境下ドル高も相まってルピアは下落幅を拡大させるものと予想。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

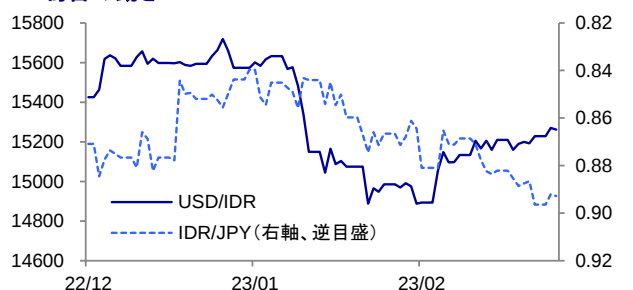
『当地で有名なインフルエンサー』

当地の有名なインフルエンサーの一人はラフィ・アフマドです。14才でモデルとしてデビュー、その後テレビCMなどに出て、俳優や歌手としても挑戦した。様々な分野で活躍した彼は、特に人気が上がったのがテレビ番組のプレゼンターとしての活躍。2014年に結婚し、盛大な結婚式を2回も行い、1回目はジャカルタで、2回目はバリ島で開催。結婚式は2つのテレビ局で生放送されたほどの人気ぶり。現在はインフルエンサーとして各ソーシャルメディアでも有名。Instagramのフォロワーが6.7千万人で当地で一位、またYouTubeのサブスクライバーも2.5千万人(4位)。また、事業家としても様々なビジネスを手掛けている。制作プロダクションをはじめ、レストランの他にサッカーやバスケットボールのクラブを持っている。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

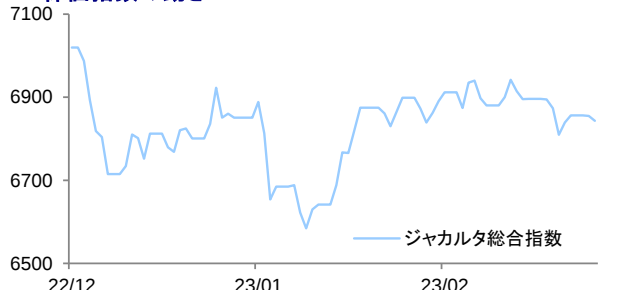
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	CPI (前年同月比)	1月	5.40%	5.28%	5.51%
2/15	貿易収支 (USD M)	1月	3,250	3,870	3,890
2/15	輸出 (前年比)	1月	12.50%	16.37%	6.58%
2/15	輸入 (前年比)	1月	1.50%	1.27%	-6.61%
2/16	BI 7daysリバースレポ金利	-	5.75%	5.75%	5.75%
2/20	経常収支 (USD M)	4Q	4,200	4,300	4,400

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 53.50 ~ 56.50
JPY/PHP 0.40 ~ 0.43

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

FOMC後の記者会見でのパウエル議長の発言はインフレ鈍化を認めるなど、警戒された程タカ派トーンではなかったことから、ドルは段安となり、ペソは昨年6月以来となる1米ドル＝53ペソ台まで大幅上昇となったが、その後、1月の米雇用統計が予想対比大幅上振れし、米引き締め継続観測が高まり、ドル大幅反発となったことに加え、12月にピークアウトすると予想されていた1月の米消費者物価指数は前年同月比+8.7%と12月の+8.1%から上昇し、14年ぶりの水準を更新したことも材料視され、ペソは一時、1米ドル＝55ドル台まで急落するなど上旬は乱高下する展開となった。

ペソ急落の反動や比大幅利上げ期待からペソは反発する局面が見られたものの、FRB高官からタカ派発言が相次ぎ広範囲なドルの強さが見られる中、ペソはじり安となったほか、1月の米消費者物価指数の結果がインフレ圧力の根強さを示す内容となり、米引き締め長期化観測の高まりからドル上昇が加速し、ペソは再び1米ドル＝55ペソ台に下落した。25BPと50BPの利上げ予想が拮抗する中、比中銀は16日に50BPの利上げを決定し、政策金利は6%に引き上げられたが、ドル上昇の流れから、ペソへの影響は限定的となった。一方、メダラ中銀総裁は次回会合での25BPまたは50BPの利上げを示唆し、データ次第としながらも上期中の利上げ継続の見解を示したことが支援材料となり、他アジア通貨の中では相対的な強さが見られたものの、中旬にかけてはペソは下落基調を維持した。

FOMC議事録公表を控えて、タカ派な内容に対する警戒感からドル買い優勢となるも、フィリピンの1月の国際収支が前月の6.1億ドルから30.8億ドルに増加したことから、アジア通貨の中ではペソは相対的な強さを見せたほか、FOMC議事要旨には特段の波乱要因がなかったことから、ドル買いポジションの巻き戻しからアジア通貨は全面高の展開となるなど、強弱材料が混じるなか、中旬のペソ安基調は一服し、下旬は1米ドル＝55ペソを挟んでのレンジ推移となった(23日時点)。米インフレに対する悲観的な見方から米引き締め継続観測が高まり、約1か月半ぶりの水準までペソ安が進むなど、月を通してペソ軟調地合いの展開となった。

■ 今月の見通し

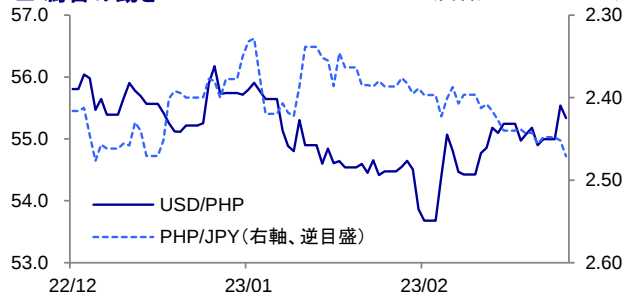
直近発表された米国の雇用統計や消費者物価指数がインフレ圧力の根強さを示す内容となったことで、ピーク金利上昇や利下げ期待が後退、年末の市場金利織り込みも上昇し、FRBメンバーの政策金利予想中央値と整合的となっている。しかしながら、エネルギー価格の高止まりや未だ堅調な米経済指標を踏まえると、インフレ鈍化のペースは今後も緩慢となる可能性があること、FRB高官達からもタカ派な発言が相次いでおり、次回3月の政策金利予想が上方修正される可能性も相応に高いことから、ドルは底堅い展開が想定される。

フィリピンに目を向けてみると、中銀は12月のインフレのピークアウトと第1四半期での利上げ打ち止めに年初に想定するも、予想外に1月のインフレが加速し、2月会合での大幅利上げ継続を迫られるなど、米国同様に引き締めサイクルの長期化の様相を呈している。フィリピンの利上げがペソの一定のサポートとなるが、ドル主導の展開は変わらず、米インフレ見通しに振られ上下変動しながらも、基調としてはペソ安となることを見込む。

また、米金利引き上げとその後の据え置きを想定すると、利下げによる本格的なドル下落トレンドへの転換の可能性は低いことに加え、底堅い国内需要とエネルギー・食糧価格の高止まりでフィリピンの貿易赤字はピークアウトを見せるも今後も高水準で推移する可能性が高く、需給面で見てもペソ売り圧力が掛かりやすい環境が継続すると予想する。

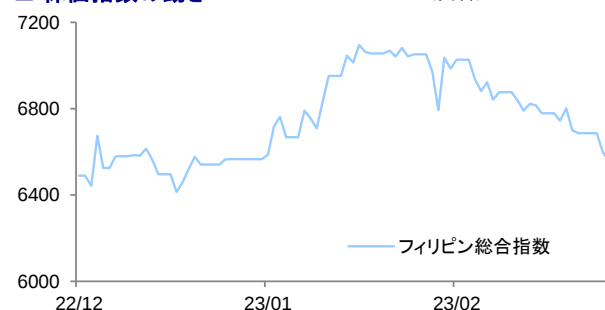
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 81.60 ~ 83.60
INR/JPY 1.60 ~ 1.71

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【2月米ドル/インドルピーは水準を切り上げた】

81.78で月初取引をスタート。1日に発表された連邦予算をインド株式市場は好感し、1.7%の株高となるとルピーにも追い風で、ドル/ルピーは81.675の安値を示現。ただ、同日中にインド新興財閥株が下落に転じると株式市場全体も反転下落となり、ルピーも売られる展開。翌2日には大台82.00を上抜けるも、3日には再び81.76まで押し戻され、82.00を挟んだ攻防となるかと目されたが、3日インド市場クローズ後に発表された米雇用統計が事前予想比強烈に強い結果となったことから米追加利上げ観測を加速させると同時に2023年内の利下げ開始観測を後退させることとなった。

これを受け、2週目のドル/ルピーは窓を開けてスタート、月曜日に82.76まで高値を伸ばし、7日火曜に82.80を上抜ける。8日にはインド中銀政策会合の結果が公表されたが、事前予想をなぞる内容にマーケットインパクトは小さかった。その後一旦は82前半まで調整するも、10日には米指数算出会社MSCIが四半期ごとの定期見直しで、インド新興財閥関連銘柄について「一部の株主が保有する株式は公開市場で自由に売買可能とまでは指定されるべきではない」と説明、インド株全体を一段と押し下げると為替市場でもルピー安に。

3週目に入ると米10年国債利回りは6週間ぶり水準、2年債利回りも昨年11月以来の高水準となり、ドル高が肯定される環境であったものの、インド中銀によるドル売り為替介入が出たことからドルは対ルピーで上昇が抑えられる展開。この頃から82.80-82.90が上値抵抗として意識される。この週は通常よりも2割程度はスポットの取引量が少なく、動意に欠ける展開。また、米金利上昇に伴って印-米金利差は縮小、ドル/ルピーのフォワードプレミアムは低下し、本来であれば実需輸出勢のドル売りが出るスポット水準であるものの、このセッションでは本格的なドル売りが出なかった。

4週目に入っても「ドル堅調だが、ドル/ルピーの上値ではドル売り介入」という様相に変化はなく、底堅い一方で、上抜けない相場。オプション市場におけるドル/ルピーの1か月インプライドボラティリティは7か月ぶりの低水準に。この間、ドル再上昇を背景として、アジア通貨全体に圧力が加かっていたことから他通貨は下落、ルピーは介入に支えられアウトパフォームする展開。

月末には82.95をつける場面もあったが、83.00は近くて遠い存在。27日執筆時点では82.82で取引されている。

■ 今月の見通し

【3月の米ドル/インドルピーは横ばいの展開を予想】

2月の相場展開は前月の本欄での予想通りの展開になっており、3月についてもキーファクターはインド中銀による為替介入だろう。ただ、インド中銀は為替介入の目的について特定の為替レートをターゲットとせず、ボラティリティを抑えることを目的としている。2月は83.00を上抜けないよう82.85レベルからドル売りをだしたが、時間をかけた上昇は高ボラティリティを意味しないため時間の経過と共にその目線は上がってくることが想定される。

3月は22日にFOMCの公表を控えており、それに向けて0.5%利上げの織り込むようなことがなければ、基調緩やかなドル高の中で83の攻防が続くのでは。

インドの次回政策会合は4月6日のため、3月は政策イベントはない。2月会合を振り返ると、物価の見通しについてFY2023通年を5.3%と大幅にインフレが緩和する予想値を出した一方で、政策スタンスは一連の利上げを行ってきた今までの会合と同じく“withdrawal of accommodation”というフレーズを据え置き、事実上利上げを示唆する内容となった。「インフレが緩和するのであれば利上げ示唆は不要」または「利上げを示唆するのであればインフレが緩和する予想は不要」とのロジックで、市場参加者の間ではちぐはぐな内容と指摘する声が強い。これを経て、4月会合までの2回ある印消費者物価指数への注目度が従前にも増して高まった。2回のうち1回については既に発表されており、事前予想を上回る6.52%の着地。次回3月13日に発表される消費者物価指数が仮に6%台後半となると印中銀の政策金利利上げ期待の高まりにつながることもとなる。

ドル/ルピー為替レートに与える影響は冒頭の2点、印為替介入と米利上げ動向が大きく、まずはこれらを見る展開。副材料としてインド中銀の4月利上げ有無を占うという観点で3月発表分の印消費者物価指数に注目したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で有名なインフルエンサー』

当地の有名なインフルエンサーと聞き真先に思い浮かぶのは、当地で知らない人はいないであろう、世界最高のバッツマンと呼ばれているクリケット界のスーパースター、ヴィラット・コーリ(Virat Kohli)である。

ヴィラット・コーリは世界で最も有名なアスリート7位にランクインし、さらには世界で最も影響力のある100人にも選出され、当地だけでなく世界的に有名なインフルエンサーであり、まさに当地の誇りといっても過言ではない。

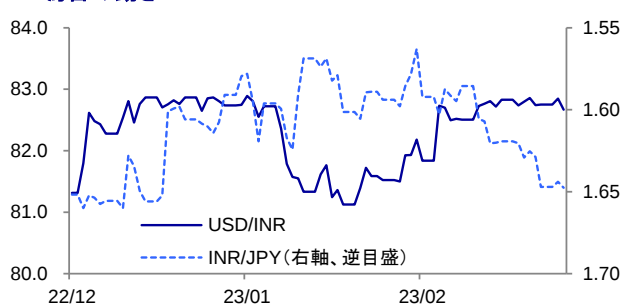
インスタグラムのフォロワー数はなんと2億3800万人！この数はサッカー界のスーパースター、ネイマールよりも多い数である。ちなみに総年収は30億円だとか。

クリケットは日本では馴染みのないスポーツだが、やってみると結構楽しいものなので、皆さんも機会があればぜひチャレンジして欲しいものだ。

(インド営業部 ニューデリ 七戸)

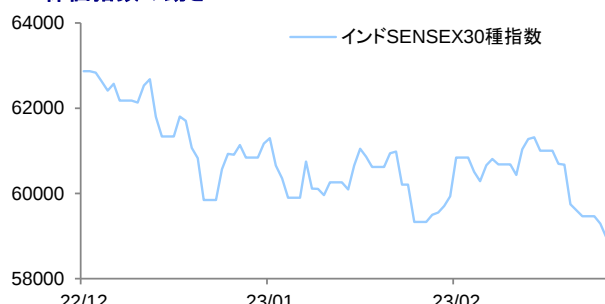
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	製造業PMI	1月	-	55.4	57.8
2/8	政策金利	-	6.50%	6.50%	6.25%
2/10	鉱工業生産	12月	5.00%	4.30%	7.30%
2/13	CPI	1月	6.00%	6.52%	5.72%

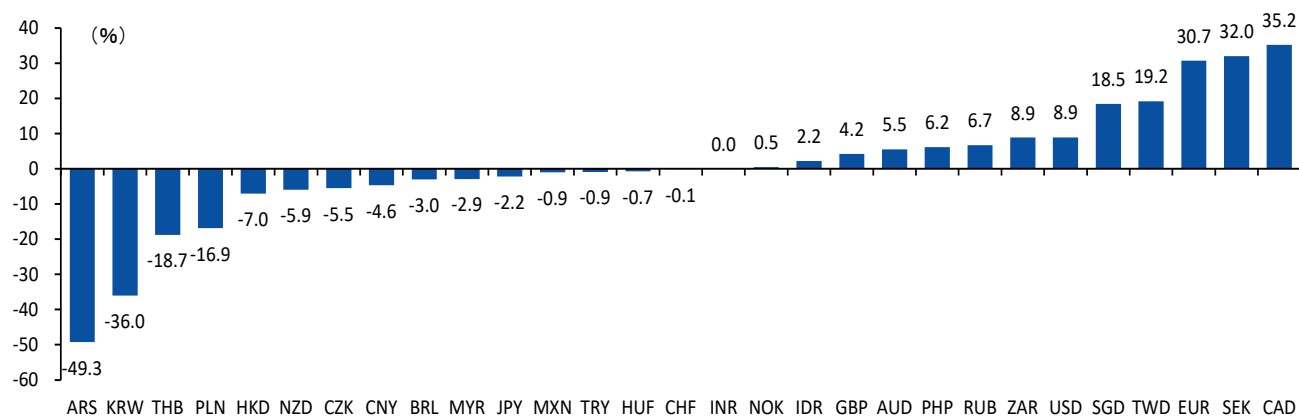
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2022年末	2023年2月末	騰落率	株式市場	2022年末	2023年2月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	33147.25	32656.7	-1.5%	-
日本	USD/JPY	131.12	136.17	3.9%	日経平均株価	26094.5	27445.56	5.2%	1.3%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0705	1.0576	-1.2%	ドイツDAX指数	13923.59	15365.14	10.4%	10.4%
英国	GBP/USD	1.2083	1.2022	-0.5%	ロンドンFTSE100指数	7451.74	7876.28	5.7%	6.2%
豪州	AUD/USD	0.6813	0.6729	-1.2%	S&P/ASX200指数	7038.688	7258.399	3.1%	4.4%
カナダ	USD/CAD	1.3554	1.3647	0.7%	S&PTロント総合指数	19384.92	20221.19	4.3%	3.6%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.8986	6.9356	0.5%	上海総合	3089.258	3279.605	6.2%	5.6%
香港	USD/HKD	7.8016	7.8494	0.6%	香港ハンセン	19781.41	19785.94	0.0%	-0.6%
インド	USD/INR	82.735	82.6687	-0.1%	インドSENSEX30種	60840.74	58962.12	-3.1%	-3.0%
インドネシア	USD/IDR	15573	15261	-2.0%	ジャカルタ総合	6850.619	6843.239	-0.1%	1.9%
韓国	USD/KRW	1260.33	1323.49	5.0%	韓国総合株価	2236.4	2412.85	7.9%	2.7%
マレーシア	USD/MYR	4.4045	4.4873	1.9%	ブルサマレーシアKLCI	1495.49	1454.19	-2.8%	-4.6%
フィリピン	USD/PHP	55.741	55.335	-0.7%	フィリピン総合	6566.39	6556.2	-0.2%	0.6%
シンガポール	USD/SGD	1.3395	1.3484	0.7%	シンガポールST	3251.32	3262.63	0.3%	-0.3%
台湾	USD/TWD	30.73	30.563	-0.5%	台湾加権	14137.69	15503.79	9.7%	10.3%
タイ	USD/THB	34.608	35.226	1.8%	タイSET	1668.66	1622.35	-2.8%	-4.5%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2023年1月時点)



■ 実質GDP成長率

	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2021	2022
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	7.0	2.7	7.0	-1.6	-0.6	3.2	2.7	5.9	2.1
日本*	1.3	-1.4	4.4	-1.7	4.6	-1.0	0.6	2.3	1.1
ユーロ圏	14.2	4.0	4.8	5.5	4.4	2.4	1.9	5.3	
英国	24.4	8.5	8.9	10.5	3.9	1.9	0.4	7.6	4.0
豪州	10.3	4.1	4.6	2.9	3.2	5.9		5.3	
カナダ*	-2.3	5.9	6.9	2.8	3.2	2.9	0.0	5.2	
エマージングアジア									
中国	8.3	5.2	4.3	4.8	0.4	3.9	2.9	8.4	3.0
香港	7.6	5.5	4.7	-3.9	-1.2	-4.6	-4.2	6.4	-3.5
インド	21.6	9.1	5.2	4.1	13.2	6.3		6.5	9.1
インドネシア	7.1	3.5	5.0	5.0	5.5	5.7	5.0	3.7	5.3
韓国	6.2	4.0	4.2	3.0	2.9	3.1	1.4	4.1	2.6
マレーシア	15.9	-4.5	3.6	5.0	8.9	14.2	7.0	3.1	8.7
フィリピン	12.1	7.0	7.8	8.2	7.5	7.6	7.2	5.7	7.6
シンガポール	17.3	8.7	6.6	4.0	4.5	4.0	2.1	9.1	3.7
台湾	7.9	4.1	5.2	3.9	3.0	3.6	-0.4	6.5	2.5
タイ	7.8	-0.2	2.0	2.2	2.5	4.6	1.4	1.6	2.6

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	22/06	22/07	22/08	22/09	22/10	22/11	22/12	23/01	2021	2022
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.6	3.5	3.7	3.5	3.7	3.6	3.5	3.4	5.4	3.6
日本	2.6	2.6	2.5	2.6	2.6	2.5	2.5		2.8	2.6
ユーロ圏	6.7	6.6	6.7	6.7	6.6	6.6	6.6		7.7	6.7
英国	3.8	3.6	3.5	3.6	3.7	3.7	3.7		4.6	3.7
豪州	3.6	3.5	3.5	3.6	3.4	3.5	3.5	3.7	5.1	3.7
カナダ	4.9	4.9	5.3	5.2	5.2	5.1	5.0	5.0	7.5	5.3
エマージングアジア										
中国									3.9	
香港	4.7	4.3	4.1	3.9	3.8	3.7	3.5	3.4	5.4	4.3
インドネシア									6.4	5.9
韓国	2.9	2.9	2.6	2.8	2.8	2.8	3.1	2.9	3.6	2.9
マレーシア	3.8	3.7	3.7	3.6	3.6	3.6	3.6		4.6	3.8
フィリピン	6.0	5.2	5.3	5.0	4.5	4.2	4.3		7.8	5.4
シンガポール	2.1	2.1	1.9	2.1	2.0	1.9	2.0		2.7	2.1
台湾	3.7	3.7	3.7	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	4.0	3.7
タイ		1.4			1.2					

(資料)ブルームバーグ、Macrobond、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	22/05	22/06	22/07	22/08	22/09	22/10	22/11	22/12	23/01	2021	2022
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	8.6	9.1	8.5	8.3	8.2	7.7	7.1	6.5	6.4	4.7	8.0
日本	2.5	2.4	2.6	3.0	3.0	3.7	3.8	4.0	4.3	-0.3	2.5
ユーロ圏	8.1	8.6	8.9	9.1	9.9	10.6	10.1	9.2	8.6	2.6	8.4
英国	9.1	9.4	10.1	9.9	10.1	11.1	10.7	10.5	10.1	2.7	9.1
豪州		6.1			7.3			7.8		2.9	6.6
カナダ	7.7	8.1	7.6	7.0	6.9	6.9	6.8	6.3	5.9	3.4	6.8
エマージングアジア											
中国	2.1	2.5	2.7	2.5	2.8	2.1	1.6	1.8	2.1	0.9	2.0
香港	1.2	1.8	1.9	1.9	4.4	1.8	1.8	2.0	2.4	1.6	1.9
インド	7.0	7.0	6.7	7.0	7.4	6.8	5.9	5.7	6.5	5.1	6.7
インドネシア	3.6	4.4	4.9	4.7	6.0	5.7	5.4	5.5	5.3	1.6	4.2
韓国	5.4	6.0	6.3	5.7	5.6	5.7	5.0	5.0	5.2	2.5	5.1
マレーシア	2.8	3.4	4.4	4.7	4.5	4.0	4.0	3.8	3.7	2.5	3.4
フィリピン	5.4	6.1	6.4	6.3	6.9	7.7	8.0	8.1	8.7	3.9	5.8
シンガポール	5.6	6.7	7.0	7.5	7.5	6.7	6.7	6.5	6.6	2.3	6.1
台湾	3.4	3.6	3.4	2.7	2.8	2.7	2.4	2.7	3.0	2.0	3.0
タイ	7.1	7.7	7.6	7.9	6.4	6.0	5.6	5.9	5.0	1.2	6.1

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2021	2022
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.3	-3.4	-3.5	-3.8	-3.9	-3.7		-3.6	
日本	3.9	4.2	3.9	3.7	3.1	2.4	2.1	3.9	
ユーロ圏	2.8	2.8	2.4	1.6	0.6	-0.3		2.4	
英国	-2.9	-3.0	-1.5	-3.0	-4.3	-4.2		-1.5	
豪州	3.0	3.5	3.1	2.3	2.0	1.0	1.2	3.1	
カナダ	-1.0	-0.6	-0.3	-0.2	0.2	0.0	-0.4	-0.3	-0.4
エマージングアジア									
中国	1.9	1.9	1.8	1.8	2.1	2.5	2.5	1.8	2.3
香港	10.2	10.0	11.8	12.6	10.9	11.6			
インド	0.4	-0.5	-1.1	-1.2	-1.9	-2.7		-1.1	
インドネシア	-0.1	0.3	0.3	0.4	0.9	0.8	1.1	0.3	1.0
韓国	5.5	5.6	4.9	4.7	4.1	2.9			
マレーシア	4.8	3.8	3.5	2.8	2.1	2.1	2.6		
フィリピン	1.8	0.3	-1.8	-2.9	-4.5	-5.8			
シンガポール	16.8	17.1	18.0	19.8	20.1	20.3	19.3	18.0	19.3
台湾	15.5	14.9	15.1	15.5	14.9	14.3	13.5	15.1	13.5
タイ	0.8	-1.7	-2.1	-2.3	-3.4	-4.0			

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	4.50-4.75	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/2/1	+25bp	2023/2/1	+25bp
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2023/1/18	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	2.50	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2023/2/2	+50bp	2023/2/2	+50bp
英国	バンク・レート	4.00	引き締め: 2021/12/16	0.10	2022/2/2	+50bp	2023/2/2	+50bp
豪州	キャッシュ・レート	3.35	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/2/7	+25bp	2023/2/7	+25bp
カナダ	翌日物金利	4.50	引き締め: 2022/3/2	0.25	2023/1/25	+25bp	2023/1/25	+25bp
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.65	緩和: 2012/6/8	6.31	2022/8/22	-5bp	2023/2/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2023/2/8	+25bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	5.75	引き締め: 2022/8/23	3.50	2023/1/19	+25bp	2023/2/16	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2023/2/23	現状維持
マレーシア	翌日物金利	2.75	引き締め: 2022/5/11	1.75	2022/11/3	+25bp	2023/1/19	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.00	引き締め: 2022/5/19	2.00	2023/2/16	+50bp	2023/2/16	+50bp
台湾	再割引金利(公定歩合)	1.750	引き締め: 2022/3/17	1.125	2022/12/15	+12.5bp	2022/12/15	+12.5bp
タイ	翌日物レポ金利	1.50	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/1/25	+25bp	2023/1/25	+25bp
ベトナム	リファイナンス金利	6.00	引き締め: 2022/9/22	4.00	2022/10/25	+100bp	2022/10/25	+100bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行